

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取り組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 2 年 9 月 2 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 17名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	2名	

※事業所記入

事業所番号	3874000353
事業所名	グループホーム みしょうの里
(ユニット名)	大樹の家
記入者(管理者)	
氏 名	濱 香代美
自己評価作成日	令和 2 年 8 月 11 日

【事業所理念】 日々の暮らしの中で語り合い、その人らしい生活の支援。	【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 (入居者一人ひとりと向き合い、気づきや工夫、アイデア等個別に記録作成ができるようになる。) (入居者一人ひとりの口腔内を確認し、健康状態を把握する。) (取り組み状況をモニターしていただくことで、今よりも少しでもサービスの質が向上できるよう意識統一を図る。) 以上、目標を3つ掲げ取り組んだ。日々の交流の中でしていただいたこと、レクリエーションや作品づくり、お手伝いや散歩、リハビリや季節を感じていただくためのドライブ等、一人ひとりの方に配慮し向き合いながら生活を楽しんでいただけるよう努めた。実施したこと の記録作成はできたが、それが発展した工夫やアイデアまでには至らず画一的な記録で終わった。もっと個性や特徴を活かした記録であることが必要。バイタル測定等による健康状態の把握により異常の早期発見で受診等につなげることができた。自立で口腔ケアを行う利用者に対して口腔内の確認はあまりできず、口腔内の歯石除去も新型コロナウイルス感染症予防対策により受診等の支援ができなかった。運営推進会議開催時、参加者に取り組み状況を説明しながら意見等伺った。地域イベントも詳しく知ることができ、利用者とともに出かけ、楽しんでいただくことができた。	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 事業所は国道からすぐの高台にあり、同一法人が経営する特別養護老人ホームの敷地内に立地している。敷地内には広い菜園があるほか、利用者が散歩できるスペースが十分にとられ、気分転換を図っている。事業所周辺には近隣民家等が少なく、特別養護老人ホームや併設のデイサービス事業所を利用している地域の利用者と気軽に親密な交流ができるようになっている。管理者と職員はともに、利用者や家族の意向を尊重し、利用者の立場に立って日々の支援に努めている。
---	--	---

評価結果表

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	◎	入居前に家族を交えた話し合いで希望や意向を確認し、入居されてからは利用者同士の何気ない会話の中にもヒントを得ながら思いに添えるよう努めている。	◎			日々の支援の中で、職員は利用者から意向や希望などの聞き取りをしており、利用者一人ひとりの思いや意見の把握に努めている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	◎	接した時の表情やちょっとした仕草で本人の思いを汲み取る努力を重ねている。心から満足された時は表情が和らぎ、言葉に出さなくても感謝の気持ちが伝わってくる。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	◎	希望や意向に添えるよう家族とともに連絡を取りながら話し合っている。希望に添えるよう努めているが家族が遠方の場合すぐに対応できず待っていただくこともある。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	◎	行動や訴え等普段と違った場合は日誌に要点を記し、ケース記録には詳細に記入し、思いを職員間で共有できるように努めている。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	本人の思いを見落とさないよう配慮を行っているが、多方面からではなく、ある一部分だけを見て判断していることもあるのでは、と思うこともある。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	◎	入所が決定した時点で本人・家族を交え生活歴や既往歴、生活状況や身体状況、介護に対する意向等フェースシートを作成している。			◎	利用者の入居が決定したら、職員は自宅や病院などを訪問し、生活歴などを利用者や家族、介護・医療関係者から聞き取りをしている。また、入居後に面会に来た親戚や知人からも、以前の話を聞くように努めている。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	◎	入所時のフェースシートの活用や生活していく中での日常的な様々な場面を目の当たりにして本人の有する力を把握できている。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	◎	外の景色で夕暮れを感じると帰宅願望が強くなったり、長い髪への憧れで髪を切ることを拒んだり、利用者にはそれぞれの思いがあることを把握している。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	◎	家族への思いや学生時代にスポーツをしていたため伸ばせなかった髪、身体的に低下していても今までできていたことがまだできるという思い等を把握できている。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	◎	日勤帯・夜勤帯を通してそれぞれ把握できている。この時間は昼寝、リビングで他者との会話、自室でのんびりテレビを楽しむ等把握できおり、変化や違いに気づけている。				
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	すぐにミーティングを行い情報を共有し、そこから意見を出し合って、場合によってはご家族へ報告し協力していただいている。			○	確認した情報はミーティングで話し合い、利用者の視点に立って「本人が何を求めているか」を職員間で検討している。また、職員は利用者本位のサービス提供の必要性について理解しているが、利用者の真の思いがくみ取れているかどうかを自問しており、確認する方法についても職員間で検討している。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	◎	ミーティングや職員会議を開催。誤嚥することが頻回になったり、気に入らないと不意に大声を上げたり、排泄を含め体調問題等安心した暮らしに向けた話し合いを重ねている。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	◎	主治医に相談し指示を仰いだり、受診することで落ち着いたり、家族に連絡し家族の声を聞いていただくことで心配事がなくなって本来の自分を取り戻せたりとできる限り対応している。				

愛媛県グループホームみしょうの里

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	一日中、折り鶴をして過ごしたい利用者には紙を準備するからを筆頭にプランを立てている。それぞれの方へと画一的でもっと工夫が必要だと思っている。				日々の会話の中で、職員は利用者の意見を聞き、家族には、面会時や電話で意向を確認している。利用者や家族から出された意見を基に、サービス担当者会議で話し合い、介護計画を作成している。遠方の家族もいるため、基本的に会議への家族の参加はない状況である。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	本人や家族の希望や意向を反映して作成している。出席できない家族の方には面会時や電話で要望等伺っている。看護職員や介護職員それぞれの立場から意見を出し合い作成している。	○		○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	健康面での支援を第一に挙げている。食事や水分等の栄養面、主治医との連携での体調維持、重度の方については健康管理を行ってからできることへとつなげている。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	○	家族や親戚、保佐人、主治医等の協力者を盛り込んだ内容となっている。				
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	介護計画に添ってケアサービス提供票を作成し、職員間で共有している。			◎	ミーティングの中で、職員は介護計画を確認し、個別のサービス内容が記載されたケアサービス提供票で共有している。サービスの実施後は、ケアサービス提供票に支援内容を記録している。また、利用者の状態等の具体的内容はケース一覧に個別に記録し、パソコンで管理している。利用者が生活場面の中で発した会話も、切り取って記録されている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	◎	ケアが実践できたか、介護計画に基づいたサービス提供票にチェックを入れている。今年の2月から新型コロナウイルス感染予防のためドライブ等の外出支援があまり提供できなかった。			○	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	◎	入浴やレクリエーション、歩行訓練等のリハビリやいつもと違った行動や訴え等記録している。			○	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	○	壁飾り等の作品づくりを好む利用者には職員とともにアイデアを出しながら季節に合わせて作っていただき、していただいたことを個別に記録している。			○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	入居者の状態に応じて3ヶ月もしくは6ヶ月で見直しを行っている。			◎	介護保険の認定期間に合わせて、利用者ごとに介護計画の見直しをしている。月1回、利用者の各担当職員がモニタリングを行い記録し、内容を職員間で共有している。利用者の状態変化があった場合には、その都度家族や医療機関と連携し、状況に応じた介護計画を作成している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	担当職員を決めて月1回モニタリングを実施し、体調の変化や支援できたことやできなかったことの確認を行っている。			◎	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	体調低下に伴い、退院時には家族にも病院でのカンファレンスに参加していただき医師や看護師、理学療法士、地域連携室の方に入院時の状態やこれからの支援等のあり方を聴いて相談していただいている。その後現状に即して介護計画を立てている。			◎	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	緊急案件があればその都度ミーティングを持ちながら話し合っている。月に1回はチームとしての協力体制が行えるよう職員会議を開催している。			◎	月1回、その日の勤務職員を中心に、2ユニット合同で職員会議を開催している。緊急案件のある場合には、その場にいる職員で話し合い、日誌やケース記録に記録して管理者等に報告している。参加できなかった職員には、口頭での申し送りをするほか、記録を確認してもらいサインされたものを管理者が確認している。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	率直に意見が言えて自由に何でも話せるような雰囲気づくりを心掛けている。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	○	日中の時間帯に出動者のみで行っているが、参加者以外の職員にも意見を聞き、会議に反映させている。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	◎	会議録に目を通してもらいながら口頭でも説明を行い、会議内容をより理解できるよう努めている。			◎	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	◎	日誌やケース記録、電話連絡等で共有できている。			○	事業所では、日誌や記録を確認した後に職員が押印する仕組みができています。重要事項の申し送りをする場合には、管理者から職員に電話連絡をすることもある。家族に対する利用者の様子や状態報告などは、各職員が責任を持って連絡しているが、連絡が重複することなどもあるため、今後の対応方法を検討することを望みたい。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	毎朝出勤と同時に日誌を確認、詳細はパソコン内のケース記録を見て把握、その上で管理者や出勤していた職員からさらに詳細に報告があり情報がすべての職員に伝わるようにしている。	◎			

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	今まで培ってきた経験の中のお手伝いや趣味等、希望に添えるよう努力している。				ほとんどの利用者は会話ができ、意思疎通が可能のため、職員は日常生活場面の中で利用者に確認しながら、自己決定をしてもらっている。現在、新型コロナウイルス感染症対策で面会や外出に制限があるため、利用者にはストレスが見られることもあるが、職員は利用者の話をゆっくり聞いたり、敷地内を散歩したりするなど、臨機応変に対応している。また、利用者一人ひとりの関心を引き出すため、職員が「戦時中の話や仕事のことなどを話題にすると、活き活きとした表情で話されている」と、管理者から話を聞くことができた。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	◎	おやつでは食べたい物を量はどのくらいが適切か、また今の季節に合わせた服装等自身で決めていただいている。			◎	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	◎	思いや希望を素直に表現できるよう常に肯定的姿勢で対応している。折り鶴はみんなで折ったと言って渡して下さいと自分で決めて差し出す方もおられる。				
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	その人自身のペースに合わせた支援を行っている。起床も起こすのではなく目覚めるのを待つ、就寝もそれぞれ、入浴では毎回1番でないと気のすまない人もおられるが、他の方に納得していただいている。それぞれの方のタイミングに合わせて支援している。				
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉(かけや雰囲気づくり)をしている。	◎	利用者の思いを把握しており、どのような言葉かけが喜びとなり、さらに活き活きと生活していただけたか表情等注意深く観察しながら支援を行っている。			◎	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	声かけやスキンシップで表情を観察し、さらに目を合わせてどのように感じているか把握に努めている。思いをうまく言葉にできない方についても気長に対応し、思いを引き出しながらその方にとってより良い暮らし方ができるよう支援に努めている。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重したい関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	外部講師を招いての職員研修会でも学んでいる。福祉に携わっている私たちにとって、その方の人権や尊厳は常に心に留め置いて支援していくものであるが、時には感情が先走って不快感を与えてしまい、反省することも多々ある。	○	◎	◎	事業所では、職員一人ひとりに「尊厳・人権に関するマニュアル」を配布している。年2回、法人全体で尊厳や人権に関する研修を実施しており、職員は利用者のプライバシーや尊厳を理解し、意識した支援している。職員の中には、まれに利用者への声かけが大きくなることもあり、注意している。居室への入室時に、職員が声かけやノックをすることは定着している。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉かけや対応を行っている。	○	プロとしての自覚を持って敬意を払いながら対応に努めているが、たまに大声での誘導や、言葉を遮ったり、利用者同士の会話に踏み込んだりしてしまうことがある。			○	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	特に排泄時や入浴時にはプライバシーに配慮を行っているが、トイレ誘導時に思わず大声で声かけをしてしまうことがあり、配慮不足を感じている。				
		d	職員は、居室は利用者専有の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	居室は利用者にとってプライバシーの場所であることを理解しており、出入りは声をかけ許可をいただいてから行っている。			○	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	プライバシーを保護し情報を漏えいさせないよう十分配慮し遵守している。				
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	日常的に、いくつもの場面で利用者の方には助けていただいている。感謝の言葉を伝えることで、さらに良好な関係性が構築できていると感じている。				職員は、仲の良い利用者同士が集まりやすいような機会を設けるなど、配慮をしている。トラブルになりそうな場合には、随時、職員が利用者の間に入り対応している。また、新しい利用者がいれば、職員は他の利用者や世話役の利用者に上手につなげ、利用者同士で支え合うことができるよう支援している。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	◎	助け合い支え合って暮らすことの大切さが理解できている。利用者同士の良好な関係性が構築できるよう努めている。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わえる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	◎	日常の様子をつぶさに観察しながら利用者同士の関係性が把握できている。不満や思いに対して会話等で真摯に向き合いながら解消できるよう努め、作品づくりやお手伝い等できることをしていただきながら少しでもストレスがなくなるよう、協調性が構築できるよう努めている。			◎	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	あきらかにその本人に対して批判をしている時は、理由を尋ねどうしてそのように感じたのか納得するまで話し合っている。ほとんどが新入居者に対する思い違いによるもので、共に生活していくうちに解決できている。				

愛媛県グループホームみしょうの里

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係 継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	○	全てとは言いがたいが把握できている。会話を繰り返す中で、ことあるごとに馴染みの人の名前が挙がっており、関係性が理解できている。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	入所時のフェースシートや認定調査票の生活歴、また利用者との日常的な会話、家族とのふれあい等で把握できている。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	この2月からは新型コロナウイルス感染症予防対策でほとんど外出はできていないが以前は馴染みの場所に出かけ、おやつや気に入った衣服の購入、またドライブで季節を楽しんでいたたりしている。住居が空き家となりになる素振りが見えたなら、本人と外出し家の状態を確認していただいたりしている。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	いつでも気軽に立ち寄れるよう家族と良好な関係が築けている。家族来訪時は居室で水入らずで過ごせるよう配慮している。現在は新型コロナウイルス感染症予防対策のため面会は中止している。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	○	町内をドライブし、海や山の景色を楽しんだり桜見物や地域の街並みを楽しまれている。また敷地内を散歩し、山桜やさつき、こいのぼりや新緑等ホーム周辺の季節感を間近に味わっていたりしている。食事づくりや入浴介助等で職員の都合を優先する場合もあり、また一人ひとりの希望に添って取り組んでいるとは言いがたい。	○	○	○	日頃から敷地周辺にある「おれんじロード」を散歩したり、庭でお茶を飲んだり、敷地内にある特別養護老人ホームの利用者などと交流をしている。現在、新型コロナウイルス感染症対策のため利用者の外出は控えているが、敷地内を散歩するなど、利用者の気分転換に努めている。また、コロナ禍で特別養護老人ホームとの交流ができていないが、ユニット間の利用者同士の交流はしている。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	△	他施設の運動会や系列保育園の各種行事に参加し交流している。特に子供たちとのふれあいには目を見張るほど喜ばれている。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	◎	本人の希望に添って敷地内散歩やドライブを支援し気分転換していただけるように努めている。			○	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	○	県外在住の家族帰省時には宿毛市までドライブされたり、また町内居住の家族と共に宿毛市の郷子で食事を何度かされたりして、家族との交流を楽しまれたりしている。				
14	心身機能の維持、 向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	施設内研修会や外部研修会等に参加しながら認知症に対して学んで理解を深めてはいるが、職員全員が正しく理解しているとは言いがたい。各利用者に対しては日常の状態を把握しており症状に対しては対応できる。				状況に応じて、職員は利用者のできること、できそうなことを見守りながら、急かさずに支援している。訪問調査日には、利用者はごぼう先生のDVDを鑑賞し、職員と一緒に楽しみながら体操をする様子を見ることができた。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	本人の思いと身体機能がかなり違う場合があるが、それぞれに合わせて少しでも向上するよう支援している。車椅子使用の方でも移動用バーや手すりでの起立を支援し両下肢の筋力低下予防に努めている。精神症状が落ち着き、歩行が可能となり車椅子からオバル使用となった方もいる。嚥下機能維持・向上にむけて毎日DVDに合わせて口腔体操も実施していただいている。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	◎	お手伝いの中でもそれぞれのできること、できそうなことに注視しながら行ってもらっている。洗濯物たたみひとつとってもタオル、衣類と振り分けて協力をお願いしている。自ら進んで行ってもらえるような場面や環境づくりに努めている。	◎		◎	
15	役割、楽しみごと、 気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	それぞれの生活歴や有する力等を把握できており、日常の行動や言動から、それぞれ何が楽しみか、どうすれば発揮できるかを把握できている。				新聞を一番に読む、日めくりカレンダーをはがす、洗濯物を干す、水やりをするなど、職員は利用者一人ひとりに合わせて、日常的な役割や楽しみが持てるよう支援している。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	今まで長い人生培ってきたものは認知症が進んでも後退することはないと感じている。毎朝の新聞を心待ちにしている人、一日中鶴を折ることを生きがいにしている人、とにかく何でも手伝って頼りにされたい人、それぞれの思いを汲み取れるよう努めている。	◎	○	◎	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	○	系列の福祉施設協会運営の特養運動会や他施設の運動会で競技に出場したり、系列の文化祭の舞台上で歌を披露したりと、楽しみや張り合いが持てるよう努めているが、地域の中での出番や役割は少ない。				

愛媛県グループホームみしょうの里

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみや おしやれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしやれについて把握している。	◎	「これが一番自分に合っているから」と、長年愛用の化粧水や乳液を使っていたり、古い愛着のある衣服を大切に着られたり、髪についてもそれぞれにその人らしさで表現されており、把握できている。				ほとんどの利用者は、毎日パジャマから普段着に着替えている。事業所では週3回、衣類の洗濯を実施し、清潔保持に努めている。食事中には衣類が汚れないよう、希望する利用者はエプロンを着用しており、汚れが見られる場合などは、職員がさりげなくカバーしている。現在、重度の利用者はいないが、管理者は「今後、利用者が重度化しても、その人らしさが保てるよう支援していきたい」と話されていた。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	◎	季節ごとに家族に協力していただいて、衣類等持参していただいている。持参品は新しいものより以前、それぞれの好みで購入されたものがほとんどでそれを使っていたりしている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	◎	ほとんど持参されている物については、以前、自身の好みで購入されており、一緒に選ぶ際にも気に入っている様子で満足そうに顔かたたりしている。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	◎	常にその人らしさを表現できるよう支援している。持参されている衣服の中から外出着や日常着を区別して着用していただいている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にせずさげなくカバーしている。（髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等）	◎	整容等身だしなみが乱れていれば本人にさりげなく接して自然形でカバーを行っている。他利用者の傍では決して口に出さず、処理もスムーズに行っている。本人の自尊心を傷つけないよう細心の注意を払っている。	○	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	◎	本人や家族の希望通りに支援を行っている。入所前の行きつけの理美容院の希望があれば家族が付き添ったり、家族が遠方であれば職員が付き添ったりしている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	◎	本人や家族が望む髪型や服装で以前と変わらないその人らしさが保てるよう努めている。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	◎	食事は身体に必要な栄養を摂って体調を維持し、また生活を豊かにできる楽しみのひとつだと理解している。				献立は法人の栄養士が作成したものを、事業所内で職員がアレンジしている。以前はスーパーから食材を配達してもらっていたが、訪問調査した月からは職員が別の店舗へ買い出しに行っている。食事は事業所内で職員が調理しており、調理時には必ず利用者に味見をしてもらうほか、後片付けも手伝ってもらっている。訪問調査日のメニューは、地元ならではの食材を使ったカツオのたたきが出され、四季に応じた筍やすももの食材が使用されていた。アレルギーのある利用者はいないが、職員は利用者の食の好みを把握しており、考慮して対応している。食器等は事業所が準備したものを使用している。食事前に利用者は職員の調理風景を見ながら、工程を確認することもある。職員は食事は一緒に摂っていないが、同じテーブルに座り見守りながら、利用者の食事の様子を確認している。現在、新型コロナウイルス感染症対策のため、利用者は横一列に並んで食べている。利用者一人ひとりに合わせて、きざみやミキサー食などの食事形態への対応もしている。また、職員が食事のことで困った場合には、法人の栄養士に相談することができる。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	○	献立は法人の管理栄養士が立て、食材は職員が注文し近隣のスーパーより配達してもらっている。切ったり並べたり、後片付けや味見等はしていただいている。おやつは利用者と一緒に出かけ、好みのものを選んでいただいている。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	全てではないが野菜の下ごしらえ等、長年の主婦としての経験が活かせるよう支援している。度々、何か手伝えることはないですかと言っていただき、おれをきちんと伝えることで自信や達成感、次への意欲となるよう努めている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	◎	入所時に本人・家族から聞き取り調査を行っており、それを記載したフェースシートを閲覧することで職員全員が把握できている。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	◎	法人の管理栄養士が献立づくりを行っているが随時変更している。カレー嫌いの方には材料をそのまま活用し肉じゃがにしてお喜んでいた。献立通りではなく揚げたてのタケノコ料理や、さんさらの葉を使って草餅やふくらし餅を作り季節を感じていただいている。毎月1日には赤飯、また五目寿司等昔懐かしいものも取り入れながら味わっていただいている。			◎	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。（安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いどりや器の工夫等）	◎	利用者の状態に合わせて工夫している。少し長めに食材を煮て柔らかくし、飲み込みやすくしている。お茶等の水物にむせやすい方には少しとろみをつけて水分も多く摂っていただけるようにしている。食事をする際には視覚も大切に彩り良い盛り付けを行っている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	個別ではないが、軽くて割れにくいセラミックの食器を使用している。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	一緒に食事は摂っていないが、状態を観察しながら何かあればすぐに対応できるようにしている。見守りながら食べるペースが早く誤嚥につながる可能性のある方には、ゆっくり食べるよう傍で声をかけている。食べこぼしがあればさりげなく対応している。				
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	◎	キッチン・リビングを囲むようにそれぞれの居室を配置しており、食事が待ち遠しい様子で全員リビングに来られている。包丁の音や匂い、献立表を確認しながらの職員の説明で、さらに食べたい気持ちが高まるよう努めている。	◎		◎	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	◎	一人ひとりの体調や日頃からの食事量・水分量が把握できている。管理栄養士による栄養バランスのとれた食事を全員ほぼ毎食全量食べられている。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	最近、同系列の特養や他施設に入所された利用者があり（現在は一人もおられない）好物で捕食したり、メバランス等の高栄養を摂ってもらったりと、体調が維持できるよう努めた。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	◎	法人の管理栄養士が立てた献立に添って調理しているため栄養のバランスはとれている。頂き物がある時は調理法を話し合いながら献立を決める場合もある。			◎	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	まな板やふきん類はキッチン用漂白剤の使用や熱湯消毒等行い衛生面で十分配慮している。食材は2日分をまとめて配達してもらっているが、残があれば当日配達分と分けて保管し、前回分から使用して期限内に使い切るようにしている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	口腔内の細菌を減らして嚥下機能を維持または向上し、誤嚥性肺炎を予防できる。口腔内を刺激することで唾液の分泌を促し飲み込みやすくする等、深く健康に関わっていることが理解できている。				口腔ケア委員が、口腔ケアマネジメントに関する利用者の個別アセスメントを作成し、6か月に1回見直しをしている。毎食後の口腔ケアは、利用者の各居室で行っており、職員は見守りながら自分で行えることはしてもらい、支援が必要な利用者には職員が介助している。口腔ケア後、職員は利用者一人ひとりの口腔内を確認するようにしている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	口腔ケア個別アセスメントを作成し口の中の状態を把握している。			○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	◎	法人で口腔ケア委員会を開催しており参加して歯科医師より口腔ケアに関する様々なことを学びながら日常の支援に活かせるよう努力している。社協作成のDVDに合わせて昼食前に利用者全員に口腔体操を毎日行ってもらっている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	現在は義歯使用者全員、自室の洗面所で自分で手入れされている。週3回の義歯消毒(ポリデント使用)は職員が管理し行っている。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	○	できる力で自分でできていたっている。口腔ケア後は歯ブラシやコップがきれいに洗浄できているか確認し清潔に気持ち良く行えるよう支援している。			○	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医に受診するなどの対応を行っている。	◎	訴え等あれば家族へ報告し歯科医に相談している。歯のぐらつきで往診をお願いしたことがある。この3月に入居された方で歯のクリーニングを希望されているが、感染症対策のため実施できていない。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	◎	排泄の自立が生きる意欲につながることは理解できている。トイレを使用することで意欲が生まれ起立が可能となり、身体機能が向上していく。自立の方で安心するからと、パットを使用したり、紙パンツを使用する方もおられる。				事業所には、「基本的に排泄はトイレで行う」という考えに基づき、職員は支援している。失敗することが不安で紙パンツを希望する利用者もいるが、職員は利用者の状態に応じて、随時見直しや提案をしている。現在、紙オムツを使用している利用者は1名となっている。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	◎	便秘は、運動不足、水分不足、食物繊維不足、腹筋力の低下、ストレス等様々な原因があり、便秘になると体調面だけでなく精神面にも影響を及ぼす。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	◎	一人ひとりの排泄表を作成しており把握できている。自立者にはトイレの時間が長ければ排便の確認をしている。自分から伝える方もいる。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	各利用者の状態に合わせたオムツの使用が支援できおり、状態に合わせて見直ししながら、対応に努めている。	◎		◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	適切な食事量・水分量を摂っているか、活動量はどうか等検討しながら対応している。かかりつけ医処方薬の投薬や産業に頼ることもある。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	それぞれの排泄パターンを把握しており、早めの声かけや訴えで支援を行っているが、間に合わず失敗されていることも時々ある。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	本人・家族の要望通りのオムツを使用している方もいれば、職員に全て任せられる。尿量や、昼間と夜間のオムツを区別したりしている。オムツ代も家族の負担となるため、適切かどうか随時検討しながら対応している。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	◎	一人ひとりの状態に合わせて下着やオムツを使い分け、快適に過ごせるよう支援している。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	利用者全員に水分を食事時には300ml、おやつ時には200mlと夜間も含め1日1300～1500mlあるいはそれ以上摂ってもらっている。朝食時にはヨーグルトを提供し、運動も各人それぞれに出来る範囲で行っているが、一部の方のみ飲み薬や産業を使用している。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)。	△	入浴の曜日や時間帯を決めて支援している。各入居者に対し週に3回で月～土曜日まで毎日、入浴支援を行っている。衣類の洗濯量が多く洗濯機・乾燥機とも家庭用で、外干しも天候によっては対応できず、午前中に入浴としている。入浴時間や温度は本人の望み通りに対応できている。	◎		○	事業所には一般浴槽と機械浴槽があり、利用者の状態によって使い分け、両ユニットの職員が協力しながら入浴支援をしている。入浴できる曜日や時間帯は職員が決めているが、入浴の順番や浴槽に浸かる時間、入浴回数は、利用者の希望に応じて対応している。病院受診後には、シャワー入浴をすることもある。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	◎	「お風呂と食事は最高ですね。」「ここのお湯はやわらかい。」と毎回、口にされ、歌をうたう方もおられる。毎回くつろいでゆったり入浴を楽しまれている。くつろいだ気分が入浴できるよう配慮している。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	声かけ・見守りしながら安心してゆったり入浴できるよう配慮している。洗髪・洗身等できるところは全て自身でもらい、足の指の間等細かい部分や手の届きにくいところは手助けしている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強ひせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	◎	現在は拒む人はひとりもなく、全員気持ち良く入浴されている。昨年の8月に入所された方について、当初、家族が嚥についてここに入れたと家族に対する不満により入浴を拒否されたこともあったが、しばらくすると落ち着かれ入浴を楽しむようになった。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	入浴前にはバイタルチェックとともに、昨日や夜間の状態も踏まえ支援している。入浴時や入浴後も行動を見守り状態を確認している。				

愛媛県グループホームみしょうの里

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	夜勤帯では仮眠もなく常時見守っており、夜間勤務職員によるケース記録を閲覧することでその夜の睡眠パターンが把握できる。				入居前から薬剤を使用している利用者が3名おり、職員は主治医と相談しながら服薬の必要性を確認している。20時頃に入眠し、3時から4時頃に覚醒される利用者もいるが、リビングで職員と一緒に過ごすなど、柔軟に対応している。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	0時頃までは何度かトイレに通い眠れない様子の方もいるが、とても静かに過ごし、0時過ぎからは朝まで良眠されている。その方独自の生活リズムがあり、静かに見守っている。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	◎	精神科の医師が定期受診で判断して眠前薬を処方している。現在2名の方が服用しており、服用することで熟睡でき、精神面でも安定している。			○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	それぞれ個室となっており、各人自由に過ごされている。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	◎	携帯電話を使用しながら頻繁に家族と連絡を取り合っている方もいる。本人から依頼があれば電話をかけて通話してもらったり、家族から電話があれば本人に出てもらって安心していただいたりしている。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	◎	職員が電話をかけ、本人と直接通話してもらっている。依頼や気持ちを汲み取る等、必要な支援は行っている。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	◎	本人の気持ちを汲み取りながら、電話をかけたい相手のその時の状況(時間帯)等判断し、支援できている。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	◎	手紙等は小包の中にたまに入っているくらいで、届いた荷物のお礼を本人に直接電話でもらっている。本人と通話することで確実に本人に荷物が届いたこと、元気に暮らしていること等伝えることができている。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	◎	手紙まではお願いしていないが、電話については協力していただいている。家族から電話があり用件だけで終わらせようとする時もあるが、家族に本人と通話してもらうようお願いし実施できている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	理解はできているが、預かり金はすべて職員が管理している。受診代や薬代、日用品等の購入に充てている。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	△	年にほんの数回スーパーで衣料品の購入の際に支払ってもらう程度で、日常的には行っていない。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	△	取引のあるスーパーへおやつを買いに職員と一緒にいき、顔馴染みになっている。				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	△	現金を所持している利用者はいないが、近くのスーパーで好物や服を買う時は本人へ財布を手渡し支払いを行っている。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	◎	所持方法や使い方は入所時に家族との話し合いで理解していただいている。預かり金台帳に入出金を記載し、家族面会時に確認していただいている。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	◎	入所時に家族と預かり金等管理依頼書や金銭管理出納サービス契約書を締結し、明確にしている。出納帳の確認は家族面会時等随時していただいている。保佐人には定期的に出納帳のコピーを渡している。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	多機能化とまでは取り組めていないが、その時々利用者の状態や家族の状況を判断し受診等の支援を行っている。	◎		◎	家族から希望があれば、利用者は外出や外食、外泊をすることができる。現在は、新型コロナウイルス感染症対策のため対応できていないが、利用者や家族から依頼があった場合には、衣類や排泄用品の購入など、その時々ニーズに合わせ職員は柔軟に支援している。

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる 玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	◎	小高い山の中腹で5月には国道から鮮やかに咲き誇ったさつきが鑑賞できる等、環境的には最高の場所に建てられている。特養と同一敷地内にあり、季節の花や観葉植物を配置している。	◎	◎	○	玄関前のプランターには花が植えられ、大きな窓にゴーヤのカーテンが作られている。敷地内には特別養護老人ホームがあり、駐車スペースも多く確保されている。
26	居心地の良い 共用空間づくり	a	共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、家庭的な雰囲気有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがあふれる。（天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。）	◎	リビングを中心として居室を配置、リビングでも居室でも思いのままゆったりできる空間を提供している。台所で調理しながら利用者の様子を観察でき、利用者は包丁の音や匂い等、食への楽しみを感じながら生活されている。季節ごとに季節に合わせた利用者とともに作った作品を飾って楽しんでいただいている。陽当りもよく心地よく過ごしていただいている。	◎	◎	◎	リビングの大型テレビの前には、ゆったりとしたソファが設置されている。ソファの前には大きな窓があり、季節の風を感じることができる。リビングの壁や居室の入口には、利用者が作成した俳句や風鈴などが飾られている。共用空間は清潔感が漂い、掃除が行き届いている。訪問調査日には、季節ごとの利用者の作品が壁に飾られ、りんどうの花も活けられてあるなど、季節を感じることができた。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	ホームに掃除担当職員2名配置しており、各所の消毒も徹底し清潔な空間が保てている。不快な音や光、臭気にも対応できている。				
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激（生活感や季節を感じるもの）を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	各利用者が心地よく過ごされているリビングの端に台所があり、野菜を切る音や煮炊きの音がすぐに感じられ、盛り付けの工夫や美味しいと喜んでいただけるよう、調理担当となった職員が心を込めて調理している。壁面や空間を利用して季節を感じていただけるよう利用者とともに作った作品を掲示し家庭的な雰囲気の中で居心地よく暮らしていただいている。			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	◎	リビングのソファで折り鶴をしたり、新聞を読んだり、お話しをしたり、廊下を散歩したりと思いいいに過ごされている。リビング横の居室ではベッドに腰を下ろし考え事したり、お昼寝したり、テレビを観たりと狭いながらも独りになれる居場所も確保できている。				
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	○	リビングに面しての共用トイレでは、出入りの時に内部が見えてしまうが、使用時はドアをしっかり閉めてプライバシーを保っている。浴室はカーテンも使用しておりプライバシーが保てている。				
27	居心地良く過ごせる 居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	それぞれの居室は限られた空間で、使い慣れた大型家具等置くには手狭であるが、愛着のある洋服や布団はそのまま使ってもらっている。自宅で使用していた椅子を持って来られ、リビングで使っている方もおられる。テレビも持参し自由に楽しまれている。	◎		○	事業所では居室にタンスやベッド、エアコンが設置されている。自宅から使い慣れた洗面道具等を持ち込み、使用している利用者もいる。
28	一人ひとりの力が 活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	◎	廊下やトイレ、浴室等には手すりがあり歩行時や起立時に使用。車椅子の方でもトイレ内部の手すりにより自由に使用できている。移動用バーにより思いのまま車椅子からベッド、ベッドから車椅子へと移乗できている。また歩行器を使用することでホーム内を自由に安全に移動できている。自室が分からなくなる方には大きな赤い花を目印とし自由に帰室できている。			◎	居室の入口には、利用者が分かりやすいように大きな花などの目印が表示されている。居室やユニット内のトイレには手すりを設置され、利用者自身で立ち上がりなどの動作ができるよう工夫している。ユニットのリビングから直接庭に出られ、利用者は花の水やりなどができるようになっている。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	歯磨き粉を乳液と勘違いして顔に塗っていた方に対しては、歯磨き粉に「これは歯磨き用です。」と貼って認識できるようにした。季節の洋服の区別ができていない方にはタンスを区別し、季節の物のみ取りだしやすいように工夫した。				
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。（ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等）	○	趣味で、折り鶴をされる方にはいつでもすぐできるような紙を準備している。自身の健康状態のため熱等のバイタルを記録する方には手帳を準備し、トイレ時間や排泄状態を記録される方にはカレンダーを準備している。毎朝の新聞が日課となっている方には起床してすぐ読めるよう朝刊を準備している。				
29	鍵をかけない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット（棟）の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。（鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等）	◎	鍵をかけることの弊害は理解できている。同法人での身体拘束高齢者虐待防止委員会や職員研修会で繰り返し学んでおり、鍵をかけることでの外の自由に行けない閉塞感や辛さが理解できる。日中はすべて解放し、リビングからでも自由に出入りできる。	◎	◎	◎	鍵をかけることの弊害について、代表者を含め職員全員が理解している。防犯のため、夜間19時から6時までの間は玄関を施錠している。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	日中はホーム内すべて鍵をかけず開放的だということを家族の方全員認識されている。ベランダで洗濯物干しを手伝ってもらっている時に、ちょうど面会があり明るく自由に生活されていることを認識されている。施錠を望む家族はひとりもない。				
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している（外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等）。	○	玄関にのみ報知器を設置し、音で出入りが分かる工夫をしている。その音で職員は確認しながら対応できている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	入所時のフェースシートや家族面会時等で把握できている。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	バイタル測定は毎朝しており、異常の早期発見ができるよう努めているが、職員の能力によって差がある。異常があれば、どうであったか、どのように対応したか詳細にケースに記載している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	普段とは違う症状があれば、看護職員に伝え、かかりつけ医へ連絡をとり往診や受診へとつなげている。かかりつけ医と気軽に相談できる関係は築けている。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	本人や家族が望む医師や医療機関を受診している。家族要望あれば送迎や受診時の付き添いも職員が行っている。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	本人・家族の希望通りのかかりつけ医との関係が築けており、適切な医療を受けることができている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	必要に応じて本人に確認し、家族とも連絡を取り相談しながら対応している。希望通りに送迎や付き添い等支援している。職員が付き添った場合は受診結果を細かく報告している。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	入院の際は既往歴や経過、薬の処方内容、睡眠・歩行状態、食事形態、排泄状況等看護職員が記載したサマリーやバイタル表を持参し情報提供している。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	お見舞い時に実際に本人の様子を見て、看護師や医師にも状態を確認している。また電話でも確認を行っている。退院前には病院でのカンファレンスに出席し医師や看護師、理学療法士、地域連携室の方々から情報を得ている。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	○	かかりつけ医や地域連携室との関係は構築できているが、かかりつけ医以外や、緊急の場合はその限りではない。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	看護職員が配置されており、状態に変化があればすぐに対応できる。特養も同一敷地内にあり特養看護職員にも相談できる環境が整えられている。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	看護職員が配置されており、連絡体制はいつでも取れる状態にある。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	状態観察やバイタル測定を行いながら健康管理に努めている。体調に変化があれば看護職員へ知らせ、緊急を要するものであればかかりつけ医へ報告し受診したり、救急搬送等に対応し早期治療ができるよう努めている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	○	医療機関の処方箋をそれぞれのケースに綴っており、確認している。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	看護職員が薬を仕分けし、職員2名で名前を確認。本人の前で声に出してもう一度名前を呼んで確認し直接渡したり、服薬介助を行ったりしている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	服薬後の状態を観察しながら支援できている。表情をはじめ食欲や排泄状態、行動面も含め観察している。今のところ、医師処方薬の投薬により症状に変化があった方はいない。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	夜間、眠前薬を2名の方が毎日服用されており、服用することで夜間安眠でき、精神面でも落ち着くことができおり、夜間の状態として記録し、受診時に報告している。				

愛媛県グループホームみしょうの里

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	入所時に重度化した場合における対応についての同意書にサインをいただいているが、実際に重度化しホームでの対応が困難になった時は改めて家族に意向を確認し希望に添って対応している。				事業所としては看取り支援の実績はないが、利用者が重度化した場合には家族や主治医、管理者等で話し合い、方針を決定し支援している。「事業所に迷惑をかけるのではないか」という家族の思いもあり、看護職員が配置されている敷地内の特別養護老人ホームに多くの利用者が移る状況となっている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	入院中に重度化しホームでの生活が困難となった場合は家族とともに担当医師との話し合いをもち、退院後さらに症状が進行した時は家族やかかりつけ医、法人の上司とも相談しどのような生活が望ましいか話し合っている。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	職員それぞれの力量は把握できており、対応できる職員と力不足を否めない職員がいる。終末期には自力で痰も上手く排出できず喀痰吸引することかなり状態が落ち着くことがあるが、喀痰吸引できる職員も限られている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	重度化となった場合の対応について本人や家族の意向を踏まえた対応に努めている。看護職員が配置されているものの技量が備わった職員に限られており、設備面でも浴室等重度者の対応ができないものとなっている。家族からは理解を得ている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	×	看取り介護に至るまでの職員の技術と知識が現段階では整っていないと感じている。重篤な場合や終末期の利用者については家族の要望をお聞きした上で病院での対応を行った。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	病弱な家族の心情や親子間での葛藤等それぞれの家族の事情を考慮し、深入りはせず傾聴することを心掛けている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	職員研修会で毎年、感染症についての話があり、学んでいる。発生した場合は速やかに特養での感染症委員会が開催され指示通りの対応や予防に努めている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	安心マニュアルの中に感染症対策があり、感染経路や処理方法、消毒薬の用法、用量等記載されている。また職員研修会において嘔吐した場合の準備物や処理方法を実技を交えた訓練を行う体制が整っている。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	◎	特養より最新の感染症発生状況や情報が入り、必要に応じて感染症委員会を開催し検討を行い、予防や対策を取っている。				
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	◎	特養よりすぐに感染症発生情報が入り、感染症委員会を開催し検討しており対応している。				
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	インフルエンザや新型コロナウイルス感染症予防のため、職員・利用者・来訪者の検温や手洗い・うがい、手指消毒等徹底に努めている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ.家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	家族と利用者本人について話し合ったり、昔はこうだったとか世間話をしたり、良い関係が築けていると思っている。				法人全体で実施する地域交流文化祭などの行事案内を家族に送付しているが、事業所のみで行う行事の案内はしていない。今年、事業所単独の行事としてそうめん流しを企画していたが、新型コロナウイルス感染症対策のため、やむを得ず中止となった。今後、事業所の行事や活動に家族が参加できるよう検討することを望みたい。事業所独自の広報誌はないが、法人で発行する機関誌には職員が一言を添え、事業所の写真等を掲載して家族に送付している。家族の意向等は、職員が電話連絡や面会時に聞いているが、職員の異動等の情報は報告できていないこともあるため、今後は家族への伝達方法などについて工夫することを期待したい。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	面会時には笑顔で気持ちの良い挨拶を心掛け、ゆつくりと居室で過せるよう配慮したり、好みの飲み物を伺い提供している。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	△	行事等には参加していただいているが、以前の様なホーム特有の催しはなく、検討が必要と感じている。	○		△	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	面会時や通話時にはホームでの日常の様子を報告したり、毎月発行している機関誌に「みしょうの里だより」として、日常のコマを写真付きで掲載し送付させていただき、家族からも日頃の様子が分かって嬉しいとの声がある。	◎		○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して報告を行っている。	○	入所時において利用料や受診の対応等不安に感じている事の相談があり、その都度詳しく説明し報告している。またホームでの生活や体調についても面会時や通話時に報告し安心していただいている。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	本人と家族の関係性を理解し、入所して数ヶ月は馴染めなかった利用者が家族との距離を置いていたが、専門医と家族を交えての話し合いや職員との信頼関係を築くことで徐々に理解し合えるようになり、今は家族とも良好な関係にある。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	面会時や大まかな行事予定は機関誌で報告を行っている。また職員の異動時にも報告をし理解を得ている。	○		○	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	△	行事(盆踊り・運動会・文化祭)への参加で交流を図る機会はあるが、そういった交流する場が少ないと感じている。				
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	入所時や面会時、ケアカンファレンス時に日頃の状態を説明し転倒や誤嚥等のリスクがあり、センサーマットを使用したり、食事の工夫を行っている事等理解していただいている。				
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	◎	利用契約書に記載し、説明により納得していただいている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退居時の理由については特養の順番が来て、入る意思がある場合や入院しそのまま退院の見込みがない場合が多い。十分に利用者や家族と話し合いの上、納得のいく退居を支援している。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	利用契約書に基本料金や加算料金、加算の内訳や介護保険給付対象外サービス(家賃・食費・光熱水費・共益費等)記載し、説明により同意を得ている。また料金改定時等においても同じである。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいや ネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する 市町の日常生活圏域、 自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	事業所の設立時や移転時には地域住民の方に集まっていただき、事業所の目的や役割等説明し、理解を得た。		◎		事業所の敷地内には特別養護老人ホームがあり、オカリナ演奏や民謡などのボランティアが来訪したり、法人の地域交流文化祭などには多くの地域住民が参加したりするなど、地域との交流を図っている。また、地域で開催されている認知症カフェには利用者と一緒に参加している。現在、新型コロナウイルス感染症対策のため、十分な交流が行えていないが、終息後には従来からの地域交流を再開する予定としている。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。（日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等）	○	町が開催する行事に出かけたり、母体施設等の行事で地域の方との交流を行っている。また施設主催の地域交流文化祭では大勢の来訪があり、知り人と会える機会でもある。地方祭では牛鬼、八鹿、唐獅子等子供の頃から慣れ親しんだ催しを楽しまれている。		○	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	○	色々な団体のボランティアやオカリナ演奏の来訪等地域の人の支援が広がっていると感じている。				
		d	地域の人が気軽に立ち寄ったり遊びに来たりしている。	△	山の中腹という環境であり、時々は見学に来られたり、利用者の知人が尋ねて来られる程度である。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	△	隣近所は1軒しかなく、挨拶をしたり会釈をする等のお付き合いで日常的なお付き合いには至っていない。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。（日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援）	○	ボランティアでオカリナ演奏に毎月来ていただいたり、特養からの流れにはなるが赤十字奉仕団によるお化粧やJA女性部の清掃ボランティア等来ていただいたが、新型コロナウイルス感染症予防のために現在は中止している。				
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	○	地域で開催される行事（旧保育所跡地でのバラ鑑賞・文化祭等）に参加したり、認知症カフェに出向き、楽しみのある暮らしを支援している。				
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている（公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等）。	○	近隣のスーパー等からの食材配達、美容院来訪によるカット、消防署と連携しての消火訓練や避難訓練、風水害の対応、救急救命講習、警察署より不審者対応についての講習、町内のグループホームや小規模多機能との集まり等関係を深め築ける取り組みを行っている。				
40	運営推進会議を 活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	2ヶ月毎に開催し利用者や家族、地域の方に参加していただいていたが、3月からは新型コロナウイルス感染症予防のため、事務局のみで開催し、メンバーには議事録を送付させていただいた。	○		○	運営推進会議には利用者や家族の参加があり、事業所の行事やサービスの取組み状況などを報告している。会議では参加者から意見や提言が出され、サービスの反映されてた内容などは再度会議の中で報告している。新型コロナウイルス感染症対策のため、今年3月からは事業所の関係者のみでの開催となっているが、会議内容は、参加メンバーに送付している。現在のところ、全ての家族には送付できていない状況である。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告している。	○	その都度、運営推進会議で報告し、外部評価結果等に関しても誰にでも閲覧できるようにしている。			○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	○	避難訓練時に気づいたことや体調急変時には職員の連携と情報共有が大事であること等アドバイスをいただいている。また食事形態の種類や介護度の度合いについての質問等聞かれることが多くわかる範囲でお答えしている。		◎	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	テーマに合わせて参加メンバーを増やすことはなかったが、メンバーの方には事前に連絡を取り、都合の良い日程や時間帯に合わせ調整を行った。		◎		
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	◎	いつでも誰でも閲覧していただけるよう会議録は玄関に設置している。参加メンバーの方には前回の議事録を配布している。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	「日々の暮らしの中で語り合い、その人らしい生活の支援」を理念として掲げ、目につきやすい場所に掲示し、振り返り確認しながら取り組んでいるが、時には利用者の思いを見過ごすこともあったのではないかなと思う。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	面会時等に目につきやすいリビングに掲示している。	○	◎		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	人事考課によりある程度は把握できていると思う。法人内の研修は全員出席している。外部研修は正規職員が参加しているが今年に入ってから新型コロナウイルス感染症の影響により参加できない状態である。				週2回、法人代表者の来所があり、職員と相談できる機会がある。何か相談ごとがあれば電話で報告するほか、代表者に来所してもらうこともある。また、事業所では勤務歴によってリフレッシュ休暇を取得できるほか、金一封が付与されるなど、働きやすさにつながる職場環境づくりがされている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	喀痰吸引等研修や感染対策研修会に参加し、職員のスキルアップの向上に取り組んでいる。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	人事考課制度を取り入れ、自己評価や目標設定を行い、また面接において要望や意見を聞き働きやすい職場環境や条件の整備により、だんだんと良くなってきている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	町内のグループホームや小規模多機能施設の代表者が集まり、3ヶ月毎に会合を開催し意見交換や情報収集している。また行政や医療関係者との研修会等にも参加している。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	親睦会の中で夕涼み会やスポーツレクリエーション、忘年会等他事業所との繋がりが交流が持てる環境づくりに取り組んでいる。	○	◎	◎	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	毎月、身体拘束高齢者虐待防止委員会を開催し話し合っている。職員研修会でも内外講師によりグループワーク等で学んでいる。				法人全体で勉強会を実施し、職員は虐待や不適切なケアについて理解している。特にスピーチロックや言葉の暴力については、管理者と職員は利用者に配慮し意識した支援に努めている。冷たく感じる言葉や上から目線の言葉かけなど、職員同士で注意し合えることもあるが、難しい場合には管理者に報告し、月1回のミーティング等で話し合うようにしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	職員会議やミーティング、会話の中で日々のケアについて振り返り話し合い反省することも多い。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見過ごされることがないように注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	虐待や不適切ケアを発見した場合の対応方法や手順についてマニュアルにも記載されており、とりえず報告の義務があることについては理解しているが全職員についていえば細かいことまでは周知できていない。			○	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	顔色や表情、声のトーン、利用者との関わり方を確認しながら、日頃と違う変化に気をつけているが、見逃している時もあると思う。				
44	身体拘束をしない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	行動を制限する為に紐で縛ったりベッド柵で囲ったり、ミトンの手袋やつなぎ服の着用等の禁止、緊急やむを得ない場合とは「切迫性・非代替性・一時性」が必要であると判断した場合は協議し委員会へ報告、説明書の作成や拘束記録等大まかに理解できている。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	定期的に身体拘束高齢者虐待防止委員会の中で、拘束や虐待にあたるケースはないか話し合う場を設けている。				
		c	家族等から拘束や施設への要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	今までにご家族より要望等はないが、転倒リスクの高い利用者にはセンサーマットの使用やベッド柵に鈴をつけ音でわかるよう工夫し、家族へも報告し理解していただいている。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する 制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	△	日常生活自立支援事業と成年後見制度の違いや利点について、学ぶ機会は少なく全職員は理解できていない。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	×	成年後見制度を利用している利用者は1名おられるが、パンフレット等での情報提供や相談に乗る等の支援を行った経緯はない。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	×	既に入所された時点では制度を利用されており、現在までに制度利用の経緯がない。				
46	急変や事故発生時の 備え・事故防止の 取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	安心マニュアルを全職員が所持し、各症状別対応方法も掲載しており、確認をしている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	急変時(喀痰吸引等)に対応できる職員は限られており、異変があればすぐに看護職員(不在時には特養の看護職員)へ知らせバイタル測定を行い指示に従っている。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	ひやり報告書に記載し受診した場合は、インシデント・事故報告書に記載し、必要に応じて町への報告を行い会議等で再発防止に向けて検討している。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	利用者一人ひとりの状態から転倒や誤嚥等のリスクがあることを検討し、職員は理解して事故防止に取り組んではいるが、キャリアやレベルにより個人差がある。				
47	苦情への迅速な対応と 改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	安心マニュアルの項目の中に「相談・苦情処理体制」を作成、相談や苦情があった場合については検討を行っている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	苦情が寄せられた場合には苦情受付書を作成し、手順に沿って対応している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	苦情は1件のみであったが、職員による利用者への被害・損害であり、上司を交えての話し合いを行った。またご本人やご家族へも早急にお詫びをする等速やかに対応した。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	介護相談員2名が7月に来所し、利用者との話し合いの場を設けている。また運営推進会議に出席し意見や思いを言っていたこともある。職員も話しやすいような雰囲気づくりや声かけを行っている。			○	月1回、管理者は各担当職員から話を聞く機会を持っている。利用者は話しやすい職員に、夜勤時など会話で意見や要望を伝えている。また、定期的な介護相談員の訪問の機会もあるが、新型コロナウイルス感染症対策のため今年度の受入れは行っていない。家族から直接意見などは出されることがないため、面会や受診時、計画更新時などに職員から積極的に話しかけ、意見を聞くようにしている。日頃から職員は利用者に声をかけ、利用者へのより良いサービス提供ができるよう、気づきのあった場合には管理者に伝えている。職員から出された意見は法人の管理者会議で報告することもある。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	相談窓口や意見箱を設置したり、面会時等には意見や要望等を伺っている。	◎		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	△	相談窓口の掲示や意見箱を設置しているが、適宜、情報提供は行っていない。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	職員会議に出席したり、年1回は職員全員と面接を実施し直接話を聞く機会を設けている。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	関係性は築けており、日頃からの会話の中や会議等で意見や提案等を聴く機会を持ち、利用者一人ひとりがその人らしく生活できるよう検討を重ねている。			○	

愛媛県グループホームみしょうの里

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	提供している支援が適切であるか振り返り、第三者の客観的立場からの評価により、利用者本位のための支援になっているか等サービスの質の向上に努めている。				外部評価によるサービス評価の結果等の報告は、運営推進会議の中で行っているが、事業所の取り組みのモニターまでは行われていない。今後は、目標達成計画の内容や実施状況について、運営推進会議等で報告し、参加者から意見や評価がもらえるよう、検討することを望みたい。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	○	外部評価後には、それぞれの項目を振り返り、特にできていないことや見過ごしていること、家族や地域の方のアンケート結果、調査員の意見等を参考にしながら話し合っている。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	評価結果を踏まえて達成計画を作成し、家族や地域の方のアンケート結果や調査員の方の意見を参考に、達成に向けて取り組んでいる。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	△	評価結果を運営推進会議参加メンバーの方へ詳しく報告は行っているが、取り組み状況の報告や定期的なモニターは行っていない。	○	○	△	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	事業所内や運営推進会議等で目標達成計画の取り組みについて話し合うことは少ないが口腔指導においては個別に観察したり、指導できていると思う。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	○	火災・地震・風水害等の災害発生時の対応についてマニュアルを作成し各職員が所持し周知している。				消防署の協力を得て敷地内の特別養護老人ホームと合同で、日中と夜間を想定した避難訓練を実施している。今年度の実施も予定しているが、新型コロナウイルス感染症対策のため、日程は決まっていない。今年、町内に出された土砂災害避難勧告時には、特別養護老人ホームに全ての利用者が実際に一時避難した経験をしている。事業所の近隣住民が少なく協力を得にくい状況にあるため、今後は家族へ合同訓練の参加を呼びかけ、防災対策に関する話し合いの機会を作るなど、検討することを望みたい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	◎	消防署に協力をお願いし、消火訓練、日中や夜間を想定した火災避難訓練、土砂災害の避難訓練を実施。また救急救命講習や警察署からは不審者対応についての講習や実技があり参加して職員全員で学んでいる。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	定期的に消火設備点検や避難経路の再確認を行っている。非常用食料等は特養に備蓄しており定期的に確認し期限内に入れ替えている。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	地域住民の方とは運営推進会議や法人全体の様々な行事等で連携を図り、また急患が出れば5分もかからず駆けつけてもらえる消防署との連携、それに続く医療機関、他事業所との支援体制ができています。	△	◎	△	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	○	グループ独自には取り組んでいないが法人全体として災害時の責任者を擁立しており、その職員や法人の代表者が消防や警察での講習会に参加したり地域の災害対策に取り組んでいる。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	○	地域の中学生へ認知症キャラバンメイトとして認知症サポーター養成講座を行い、認知症についての理解や対応方法等の啓発活動に取り組むことができた。				事業所では、町内のグループホームや地域包括支援センター等で開催する「あいなん活き活き推進会議」へ参加、協力するほか、中学生への認知症学習など、地域活動も協力しながら実施している。地域住民からの事業所の空き情報などの電話問い合わせには対応しているが、地域の認知症の人やその家族から相談に応じるまでには至っていない。今後は事業所として、地域住民への認知症ケアに関する支援などについても検討することを望みたい。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	△	相談は少ないが、本人や家族から「グループホームにはどうしたら入れるのか。」といった相談を電話で受けることがある。		○	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェイベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	×	グループでは解放し活用を行っていないが、特養では文化祭や地域交流の場として活用しているため、参加はしている。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	希望者があれば実習の受け入れも可能であり、地域の方も清掃ボランティアに来ていただいた。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	○	町内のグループホームや小規模多機能、地域包括職員との話し合い（スマプロ会）を年に4回開催し、昨年12月には地域イベントである「あいなん活き生き推進大会」に参加することで協力し合い連携が図れた。			○	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取り組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 2 年 9 月 2 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 17名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	2名	

※事業所記入

事業所番号	3874000353
事業所名	グループホーム みしょうの里
(ユニット名)	四季の家
記入者(管理者)	
氏 名	濱 香代美
自己評価作成日	令和 2 年 8 月 11 日

【事業所理念】 日々の暮らしの中で語り合い、その人らしい生活の支援。	【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 (入居者一人ひとりと向き合い、気づきや工夫、アイデア等個別に記録作成ができるようになる。) (入居者一人ひとりの口腔内を確認し、健康状態を把握する。) (取り組み状況をモニターしていただくことで、今よりも少しでもサービスの質が向上できるよう意識統一を図る。) 以上、目標を3つ掲げ取り組んだ。日々の交流の中でしていただいたこと、レクリエーションや作品づくり、お手伝いや散歩、リハビリや季節を感じていただくためのドライブ等、一人ひとりの方に配慮し向き合いながら生活を楽しんでいただけよう努めた。実施したことの記録作成はできたが、それが発展した工夫やアイデアまでには至らず画一的な記録で終わった。もっと個性や特徴を活かした記録であることが必要。バイタル測定等による健康状態の把握により異常の早期発見で受診等につなげることができた。自立で口腔ケアを行う利用者に対して口腔内の確認はあまりできず、口腔内の歯石除去も新型コロナウイルス感染症予防対策により受診等の支援ができなかった。運営推進会議開催時、参加者に取り組み状況を説明しながら意見等伺った。地域イベントも詳しく知ることができ、利用者とともに出かけ楽しんでいただくことができた。	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 事業所は国道からすぐの高台にあり、同一法人が経営する特別養護老人ホームの敷地内に立地している。敷地内には広い菜園があるほか、利用者が散歩できるスペースが十分にとられ、気分転換を図っている。事業所周辺には近隣民家等が少なく、特別養護老人ホームや併設のデイサービス事業所を利用している地域の利用者と気軽に親密な交流ができるようになっている。管理者と職員はともに、利用者や家族の意向を尊重し、利用者の立場に立って日々の支援に努めている。
---	--	---

評価結果表

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	利用者との会話の中で「どうしたいですか」と問いかけたり思いを聞き、意向の把握に努めている。	◎		◎	日々の支援の中で、職員は利用者から意向や希望などの聞き取りをしており、利用者一人ひとりの思いや意見の把握に努めている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	情報や言動から、どうしたいのか考えたり、家族の意向に応じた対応をしている。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	△	面会時には、最近の様子と対応について説明したり、ご家族や兄弟、知人からは「昔はこうであった」と教えていただく方もいる。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	利用者の訴えや行動が普段と違うことがあればケースに記録し、職員間で共有している。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	決めつけがちであるが、なるべく本人の思いに配慮し、対応を心掛けている。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入所前に調査に行き、本人や家族とともに生活歴や既往歴、生活状況や身体状況、介護に対する意向などを伺い、作成している。			◎	利用者の入居が決定したら、職員は自宅や病院などを訪問し、生活歴などを利用者や家族、介護・医療関係者から聞き取りをしている。また、入居後に面会に来た親戚や知人からも、以前の話を聞くように努めている。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	日々の関わりの中でできることできないことを判断し、把握に努めている				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	日々の生活の中での会話や行動を観察し把握に努めている。不安そうな時は、気分転換ができるよう支援している。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	○	要因が何なのか把握に努め、関り方や不安要素を取り除けるよう努めている。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	毎日、バイタル測定を実施し、日中の状態や夜間の状態を記録し、いつもと違う変化について把握している。				
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	△	得た情報をもとに、ミーティングや職員会議で話し合いをしているが充分ではない。			○	確認した情報はミーティングで話し合い、利用者の視点に立って「本人が何を求めているか」を職員間で検討している。また、職員は利用者本位のサービス提供の必要性について理解しているが、利用者の真の思いがくみ取れているかどうかを自問しており、確認する方法についても職員間で検討している。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	○	ミーティングや職員会議で話し合い、むせ込みや飲み込みが悪くなった方や以前より活気がみられなくなった方について検討している。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	体調面においては、かかりつけ医へ相談し、指示を仰いだりしている。食事形態の工夫や帰宅願望のある方には家族へ相談し、協力していただいている。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	家族面会時に要望や希望等を伺い、本人からも聞き取り、反映できるよう努めている。				日々の会話の中で、職員は利用者の意見を聞き、家族には、面会時や電話で意向を確認している。利用者や家族から出された意見を基に、サービス担当者会議で話し合い、介護計画を作成している。遠方の家族もいるため、基本的に会議への家族の参加はない状況である。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	本人や家族に要望や希望を伺い、これで良いか確認し、了承を得ている。その人らしい独自のプランになっているのか、もっと掘り下げた介護計画にする必要があると思う。	○		○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	重度の方は、意思疎通が難しく健康管理が主体になってしまうことが多いため、一動作に対して必ず声をかけを行い安心していただけるよう努めた。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	○	協力いただける家族や親戚の方、D等サービス内容に取り組んでいる。				
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	一人ひとりのケアサービス提供表を作成し共有しながら、毎日どうだったかチェックしている。			◎	ミーティングの中で、職員は介護計画を確認し、個別のサービス内容が記載されたケアサービス提供票で共有している。サービスの実施後は、ケアサービス提供票に支援内容を記録している。また、利用者の状態等の具体的内容はケース一覧に個別に記録し、パソコンで管理している。利用者が生活場面の中で発した会話も、切り取って記録されている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	毎日、一人ひとりのサービス内容をチェックし、職員間で確認しながらケアを行い、実践できている。			○	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	○	毎日、短い文面ではあるが、記録できている。しかし、職員間で格差があると感じている。状態変化があった場合は時系列に添って記録している。			○	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	△	日々のレクリエーション等楽しんだことを記録しているが、気づきや工夫、アイデア等掘り下げた内容の記録には至っていない。			○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	利用者の状態によって、3ヶ月または6ヶ月毎に見直しを行っている。			◎	介護保険の認定期間に合わせて、利用者ごとに介護計画の見直しをしている。月1回、利用者の各担当職員がモニタリングを行い記録し、内容を職員間で共有している。利用者の状態変化があった場合には、その都度家族や医療機関と連携し、状況に応じた介護計画を作成している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	介護計画に沿って毎月モニタリングを実施し、現状確認を行っている。			◎	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	退院後の濃密カンファレンス、変化が生じた場合もケアカンファレンスを実施し、本人や家族からも引き続き要望等伺いながら作成している。			◎	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	ミーティングや施設長を交えての職員会議で話し合いを行っている。			◎	月1回、その日の勤務職員を中心に、2ユニット合同で職員会議を開催している。緊急案件のある場合には、その場にいる職員で話し合い、日誌やケース記録に記録して管理者等に報告している。参加できなかった職員には、口頭での申し送りをするほか、記録を確認してもらいサインされたものを管理者が確認している。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	活発な意見交換とまではいかないが、遠慮なく考えや気持ちを話し合えるよう努めている。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	○	会議は全員参加ではないが、出勤している職員には、それぞれ意見や疑問点等事前にメモ書きしてもらい会議で反映させている。しかし、一部職員だけで全員から意見等が集まることはない。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	◎	会議担当の記録係が会議内容を作成し、職員全員に閲覧できるよう日誌に綴じている。			◎	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	○	主に日誌を活用しているが、別で家族連絡ファイルを作り、職員間で共有できるようにしている。			○	事業所では、日誌や記録を確認した後に職員が押印する仕組みができています。重要事項の申し送りをする場合には、管理者から職員に電話連絡をすることもある。家族に対する利用者の様子や状態報告などは、各職員が責任を持って連絡しているが、連絡が重複することなどもあるため、今後の対応方法を検討することを望みたい。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	日誌には簡潔に記入し、パソコン内のケース欄に記録し情報共有ができるようにしている。	◎			

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	一人ひとり把握できていないが、散歩や畑の野菜の育ち具合、リハビリ、カラオケ等思いに添えるよう努めている。				ほとんどの利用者は会話ができ、意思疎通が可能のため、職員は日常生活場面の中で利用者に確認しながら、自己決定をしてもらっている。現在、新型コロナウイルス感染症対策で面会や外出に制限があるため、利用者にはストレスが見られることもあるが、職員は利用者の話をゆっくり聞いたり、敷地内を散歩したりするなど、臨機応変に対応している。また、利用者一人ひとりの関心を引き出すため、職員が「戦時中の話や仕事のことなどを話題にすると、活き活きとした表情で話されている」と、管理者から話を聞くことができた。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	クラブ、行事への参加や外出等、本人へ聞いて支援している。また、パン食時に飲み物は何が良いか自分で決めていただいている。			◎	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	○	夕方になると帰宅願望がみられ、不安な状態がみられた時は、傍に寄り添い傾聴したり、本人のできる作業をして心を和ませてもらっている。				
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	起床や就寝時間は一人ひとりのペースに合わせて対応している。食事についてもゆとり食べられる方は、少し早めに食べていただいたり、焦ることのないよう配慮を行っている。				
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	◎	その人の得意なことや好きなこと、普話をすることで活き活きとした表情がみられる。			◎	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	意思疎通が困難であっても、歌やリハビリの好きな方は、手拍子されたり、職員のマネをしてリハビリを行っている。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重したい関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	職員研修会において、全員参加し学んでいる。人格を持った一人の人間として接している。	○	◎	◎	事業所では、職員一人ひとりに「尊厳・人権に関するマニュアル」を配布している。年2回、法人全体で尊厳や人権に関する研修を実施しており、職員は利用者のプライバシーや尊厳を理解し、意識した支援している。職員の中には、まれに利用者への声かけが大きくなることもあり、注意している。居室への入室時に、職員が声かけやノックをすることは定着している。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	△	トイレの排泄支援を行う際には、人前であるにも関わらず「トイレにいきますか?」と声かけする時がある。耳元でさりげない行動に配慮すべきだと反省することがある。			○	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら助助を行っている。	○	トイレの戸を閉め、排泄時間を確保している。脱着時や入浴時等プライバシーに配慮している。				
		d	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	居室入る際には、ノックをして入室している。リビングに居られる時は、声かけし入室の許可を得ている。			○	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	個人情報保護に関する義務が課せられていることを理解し、順守している。				
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	日常的に、いくつもの場面で利用者の方には助けていただいている。感謝の言葉を伝えることで、さらに良好な関係が構築できていると感じている。				職員は、仲の良い利用者同士が集まりやすいような機会を設けるなど、配慮をしている。トラブルになりそうな場合には、随時、職員が利用者の間に入り対応している。また、新しい利用者がいれば、職員は他の利用者や世話役の利用者に上手につなげ、利用者同士で支え合うことができるよう支援している。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	◎	利用者同士が声をかけ合い食事やティータイムをとったり、徘徊する利用者に声をかけたりしている。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	◎	利用者の関係性を把握し、トラブルを回避している。ソファの座る場所や孤立しがちな利用者には、ユニットレク作品づくり等を通して一緒に交流する機会を作っている。また、徘徊する利用者に声をかけ隣に座り、会話されている。			◎	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	その際には職員が間に入り話題を変えたり、歌をうたい気分転換を図ったりしている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係 継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	○	入居時のフェイスシートや面会時等である程度、把握できている。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	生活歴や本人が会話の中で時々口にする場所などで把握できている。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	知人が訪ねて来られ、一緒にお花見や忘年会に出かけられる利用者の方もいる。また、宗教の祭りに参加された。家族と外出された時に、自宅で愛犬と触れ合ったり、近所の人と話をしたり、馴染みの人や場所が途切れないよう支援している。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	面会に来られたら飲み物をお出しし、居室でゆっくり過ごしていただいていたが、この2月からは新型コロナウイルス感染症予防対策のため面会を中止している。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	○	天気の良い日にはホームの外へ出て、散歩をしたりプランターの花植えや野菜の収穫なども行っていたりしている。特養でのクラブや行事にも参加し花見や季節毎のドライブを楽しみにしている。	○	○	○	日頃から敷地周辺にある「おれんじロード」を散歩したり、庭でお茶を飲んだり、敷地内にある特別養護老人ホームの利用者などと交流をしている。現在、新型コロナウイルス感染症対策のため利用者の外出は控えているが、敷地内を散歩するなど、利用者の気分転換に努めている。また、コロナ禍で特別養護老人ホームとの交流ができていないが、ユニット間の利用者同士の交流はしている。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	△	他施設や特養の運動会などで地域のボランティアの方の見守り等の協力を得て外出支援を行った。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	○	車椅子を使用し天気の良い日には散歩や日光浴等で気分転換していただけるよう支援している。			○	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	○	家族に協力していただき、自宅や家族宅等への外出の支援をしていたりしている。				
14	心身機能の維持、 向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	職員会議や研修等で勉強し理解しているつもりではあるが、一人ひとりの心理症状を考え傾聴しながら対応しているが、職員全員が正しく対応できているとは限らないと思う。				状況に応じて、職員は利用者のできること、できそうなことを見守りながら、急かさずに支援している。訪問調査日には、利用者はごぼう先生のDVDを鑑賞し、職員と一緒に楽しみながら体操をする様子を見ることができた。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	◎	毎日、口腔体操やリハビリ体操を行い筋力や嚥下機能の低下予防を行い、身体面の機能維持向上に努めている。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	利用者一人ひとりができることを見極め、在存機能を活かし入浴や排泄時にはできるところまではしていただき、見守りを行っている。ボタン付けもしていただいている。	◎		◎	
15	役割、楽しみごと、 気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	一人ひとりの生活歴を把握し、趣味や特技を活かせるよう支援している。				新聞を一番に読む、日めくりカレンダーをはがす、洗濯物を干す、水やりをするなど、職員は利用者一人ひとりに合わせて、日常的な役割や楽しみが持てるよう支援している。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	◎	俳句づくりやカレンダー曜日の作成、歌や踊りが好きな方等それぞれ喜びや楽しみが持てるよう支援している。また、洗濯たたみ等のお手伝いも快くいただき張り合いのある生活支援を行っている。	◎	○	◎	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	△	地域交流文化祭等、見学に出かけ楽しみを持っていただくよう支援した。				

愛媛県グループホームみしょうの里

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみや おしやれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つとらえ、その人らしい身だしなみやおしやれについて把握している。	○	毎朝、各居室の洗面所で身だしなみを整えている。お化粧をしておしやれを楽しまれている方もいる。				ほとんどの利用者は、毎日パジャマから普段着に着替えている。事業所では週3回、衣類の洗濯を実施し、清潔保持に努めている。食事中には衣類が汚れないよう、希望する利用者はエプロンを着用しており、汚れが見られる場合などは、職員がさりげなくカバーしている。現在、重度の利用者はいないが、管理者は「今後、利用者が重度化しても、その人らしさが保てるよう支援していきたい」と話されていた。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	○	家族に好みの持ち物を持参していただいたり、以前から行きつけの美容院で好みの髪型にしている方もいる。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	本人に衣類を「どれにしますか」と見せたりしているが反応がない方は職員が選んでいる。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	◎	普段着と外出着を区別し、外出時には上着や帽子を被りおしやれをして外出していただいた。また行事の参加時にはお化粧をしたり等の支援を行った。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にせずさげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	◎	毎朝、髭剃りや整容を行い身だしなみを整えているが、食べこぼしや口の周りの汚れ、鼻水や唾液が出ている方は特に気をつけてタオルを活用したりさりげなく汚れを拭きとっている。	○	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	○	ホームへ来ていただき散髪しているが、家族と外出し行きつけの美容室で散髪される方もいる。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	整容や身だしなみに気をつけて好みそうな服を上下選び支援している。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	食事の栄養面やバランスはもちろん食事は一連のプロセスで五感を研ぎ澄ませることができ最も楽しみの一つである。				献立は法人の栄養士が作成したものを、事業所内で職員がアレンジしている。以前はスーパーから食材を配達してもらっていたが、訪問調査した月からは職員が別の店舗へ買い出しに行っている。食事は事業所内で職員が調理しており、調理時には必ず利用者に味見をしてもらうほか、後片付けも手伝ってもらっている。訪問調査日のメニューは、地元ならではの食材を使ったカツオのたたきが出され、四季に応じた筍やすももの食材が使用されていた。アレルギーのある利用者はいないが、職員は利用者の食の好みを把握しており、考慮して対応している。食器等は事業所が準備したものを使用している。食事前に利用者は職員の調理風景を見ながら、工程を確認することもある。職員は食事は一緒に摂っていないが、同じテーブルに座り見守りながら、利用者の食事の様子を確認している。現在、新型コロナウイルス感染症対策のため、利用者は横一列に並んで食べている。利用者一人ひとりに合わせて、きざみやミキサー食などの食事形態への対応もしている。また、職員が食事のことで困った場合には、法人の栄養士に相談することができる。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	献立は特養の栄養士が考えたものであり、食材は近くのスーパーから配達していただいている。利用者と一緒に出ることが少ないと感じている。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	ごぼうのさがきなど下ごしらえをいただいていたが、現在は出来る方がいない。コップや下膳等、できる時にはいただいている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入所時のフェースシートの記載で把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	◎	春には筍料理や地元名産のカツオのたたきを度々提供している。また、毎月1日にはお赤飯を蒸し、秋には畑で収穫したお芋等を調理し、昔懐かしい味に喜ばれている。			◎	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いどりや器の工夫等)	○	一人ひとりの咀嚼・嚥下状態を把握し、状態に合わせて食事形態を工夫し提供している。水ものにむせ込みやすい方には、とろみをつけて水分も多く摂っていただいている。また彩り良い盛り付けで食欲が湧くようにちょっとした工夫をしている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	一人ひとり別々の物ではないが、使いやすい割れにくい物を使用している。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	職員は利用者と一緒に食事を摂っていない。利用者一人ひとりの食事のペースに合わせた声かけや見守りを行い、混乱しないように配慮している。				
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	各部屋は台所から聞こえる音やにおいを感じることができメニューを伝えることで食欲をそそっている。	◎		◎	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	◎	一人ひとりの食事量や水分量を把握している。1ヶ月毎の体重測定で増減をチェック管理できている。				
		k	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	食事量の少ない時は段階的に食事形態を工夫したり、高カロリー補助食品を摂っている。水分は好みの飲み物(ジュースやコーヒー等)で摂っていただいている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	特養の栄養士が立てた献立をもとに調理している。			◎	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	まな板やふきん等ハイターや熱湯消毒を毎日行っている。食材は2日分を配達してもらい新鮮な食材を使用している。賞味期限切れがないか確認している。				

愛媛県グループホームみしょうの里

項目 No.	評価項目	小 目 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	特養での職員研修会や口腔ケア指導に参加し、口腔ケアの必要性・重要性を学び理解している。				口腔ケア委員が、口腔ケアマネジメントに関する利用者の個別アセスメントを作成し、6か月に1回見直しをしている。毎食後の口腔ケアは、利用者の各居室で行っており、職員は見守りながら自分で行えることはしてもらい、支援が必要な利用者には職員が介助している。口腔ケア後、職員は利用者一人ひとりの口腔内を確認するようにしている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	口腔ケア個別アセスメントを作成し口の中の状態を把握している。			○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	◎	毎月一回の口腔ケア委員会へ職員が出席し歯科医からの口腔ケア指導と助言を受けている。また食前に口腔体操を毎日実施している。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	職員が傍で付き添い、声かけすることで自分で義歯を磨ける方は磨かれている。職員が週3回ポリドント洗浄を行っている。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	◎	コップや歯ブラシを準備し声かけすることでご自身で歯磨き出来る方は歯磨きや嗽を行っている。全介助の方はスポンジブラシや歯磨きティッシュを使用し口腔内を清潔にしている。			○	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医に受診するなどの対応を行っている。	○	腫れや不具合がある時にはご家族に連絡し、行きつけの歯科に往診していただいた。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	状況に応じて使い分けをしている。安易にオムツや紙パンツにすることがないように気をつけている。				事業所には、「基本的に排泄はトイレで行う」という考えに基づき、職員は支援している。失敗することが不安で紙パンツを希望する利用者もいるが、職員は利用者の状態に応じて、随時見直しや提案をしている。現在、紙オムツを使用している利用者は1名となっている。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	食事量・水分量・運動不足・腸の動きなどが原因で、落ち着きがなくなり不穏状態になっていく等、及ぼす影響について理解している。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	◎	一人ひとりの排泄チェック表に時間を記入し、排便があれば○で囲み、量については線(点線もしくは一本線)を引き、全員が把握できるようにしている。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	一人ひとりの排泄状況を把握した上で、必要性、適切性について見直しながら快適に過ごせるよう努めている。	◎		◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	◎	水分量や活動量を増やしたり、腹部マッサージをしている。また、毎朝ヨーグルトを食べていただいている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	利用者の方、それぞれの排泄パターンや兆候をチェックし、早目の声かけや誘導を行っているが、間に合わず失敗されていることもある。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	△	オムツ代は家族負担であるため、相談させていただくが「どのような物が良いか分からないのでお任せします」と言われることが多い。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	入居者一人ひとりの排泄量や状態に合わせて随時見直し、検討をしている。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	ヨーグルトを食べていただいたり、水分を多く摂っていただく等しているが、一部の方は自然排便が行えず飲み薬や座薬を使用している。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)。	△	入浴回数や曜日は決めている。湯加減や時間はそれぞれの好みを把握し支援している。	◎		○	事業所には一般浴槽と機械浴槽があり、利用者の状態によって使い分け、両ユニットの職員が協力しながら入浴支援をしている。入浴できる曜日や時間帯は職員が決めているが、入浴の順番や浴槽に浸かる時間、入浴回数は、利用者の希望に応じて対応している。病院受診後には、シャワー浴をすることもある。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	○	好みの湯加減とゆつくりした時間で気持ち良く入浴していただいている。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	声かけしながらできる範囲でしていただき、見守りながら安全への配慮を行っている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	◎	入居されている方はお風呂好きな方ばかりであるが、入浴を嫌がられた時には時間を置いて職員が代わって声をかけ対応した。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	入浴前にバイタル測定を行い、前日や朝の状態を確認し支援している。入浴時には皮膚の状態も確認し、入浴後の状態も観察しながら水分補給を行っている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	利用者一人ひとり夜間の状態をケース記録できしており、職員で共有できている。				入居前から薬剤を使用している利用者が3名おり、職員は主治医と相談しながら服薬の必要性を確認している。20時頃に入眠し、3時から4時頃に覚醒される利用者もいるが、リビングで職員と一緒に過ごすなど、柔軟に対応している。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	日中、散歩やリハビリ体操等で活動量を増やしたり、室温調整も行い音や明るさを配慮している。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	体調的な面から、夜間ゆっくり休んでいただくよう家族やかかりつけ医に相談し、服用に至った場合もある。家族やDrと連携しながら対応に努めている。			○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	各居室それぞれ個室になっており、休息や昼寝等自由に過ごしていただいている。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	◎	誕生日や母の日に贈り物が届いた時は、本人から直接お礼を言っていたい。また、遠方のご家族から手紙や写真を送ってきていただいた。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	電話してほしいと訴えがあった時には職員が連絡を取ったり、家族から電話がかかった際には、本人に変わって通話されている。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	◎	家族へ電話してほしいと訴えがあった時には本人からではないが、職員が連絡を取っている。携帯電話を持参している入居者もおられる。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	◎	手紙やハガキが届いたら、すぐに相手と連絡を取り近況報告し、ご本人とも通話していただいている。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	◎	贈り物や手紙が届いたら、すぐに電話連絡し、相手の方からも喜んでいただいている。手紙や写真を受け取られるととても嬉しそうに何度も見たり、読んでりしていることを家族等へ報告している。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	理解はできているが支援は行っていない。一部はお預かりしているがお金を所持されている方はいない。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	△	年にほんの数回スーパーへ衣料品の購入の際に支払ってもらう程度で、日常的には行っていない。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	△	取引先のあるスーパーへおやつを買いに職員と一緒にいき、顔馴染みになっている。				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	△	現金を所持している利用者はいないが、近くのスーパーでおやつ等を買う時は本人へ財布を手渡し支払いを行っている。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	預り金台帳にお金のお出入金を記入し家族の面会時に確認していただき入金時にはサインしていただいている。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	◎	入居時に家族と預り金等、管理依頼書や金銭管理出納サービス契約書を締結している。預り金台帳に入出金を記入しご家族に確認していただいている。また、預かり証をお渡ししている。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	家族の都合により受診介護できなくなった利用者は職員で対応したり、送迎介助等支援している。	◎		◎	家族から希望があれば、利用者は外出や外食、外泊をすることができる。現在は、新型コロナウイルス感染症対策のため対応できていないが、利用者や家族から依頼があった場合には、衣類や排泄用品の購入など、その時々ニーズに合わせ職員は柔軟に支援している。

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる 玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	特養と同一敷地内にあり玄関には季節の花を植えたプランターを置いている。小高い山の中腹で特養から奥に入っており、静かな場所に建てられている。	◎	◎	○	玄関前のプランターには花が植えられ、大きな窓にゴーヤのカーテンが作られている。敷地内には特別養護老人ホームがあり、駐車スペースも多く確保されている。
26	居心地の良い 共用空間づくり	a	共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、家庭的な雰囲気有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。（天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそごような設えになっていないか等。）	◎	リビングを中心として各部屋に分かれているため、リビングでは心地よく過ごしていただいている。玄関等には季節を感じられる物を利用者と一緒に作り飾っている。毎月のカレンダーは利用者に字や数字を書いていただき作成している。	◎	◎	◎	リビングの大型テレビの前には、ゆったりとしたソファが設置されている。ソファの前には大きな窓があり、季節の風を感じることができる。リビングの壁や居室の入口には、利用者が作成した俳句や風鈴などが飾られている。共用空間は清潔感が漂い、掃除が行き届いている。訪問調査日には、季節ごとの利用者の作品が壁に飾られ、りんどうの花も活けられてあるなど、季節を感じることができた。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	汚れがあればすぐに拭き取り、トイレ等の臭気対策を行い、掃除も行き届いている。換気や室温調整も行っている。				
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激（生活感や季節感を感じるもの）を生活空間の中に取り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	台所から聞こえる材料を切る音やにおいて食欲を刺激したり、畑やプランターで季節の野菜の植え付けや収穫をしたりと、五感に働きかける支援を行っている。また、リビングの窓からはプランターの花や野菜、春には山桜が見えて季節感を感じていただいた。			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	◎	リビングのソファで気の合う方や隣ユニットの入居者の方とも思い思いに過ごしていただいている。各個室となっており、居室がリビングへ通じているため、人の気配を感じながらもプライバシーが確保できていると思う。				
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	◎	トイレや浴槽にはドアがあり浴室にはカーテンが設置されており、プライバシーを保つことができる。				
27	居心地良く過ごせる 居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	入居時に、自宅で使用していた椅子や机を居室へ配置し、家族写真や雑貨で居室を彩る等、安らげる居室づくりに努めた。	◎		○	事業所では居室にダンスやベッド、エアコンが設置されている。自宅から使い慣れた洗面道具等を持ち込み、使用している利用者もいる。
28	一人ひとりの力が 活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	◎	フロア内には手すりや設置されており、一人で歩行できる方も安全に移動できるようになっている。また、各居室には洗面台が設置されており、整容や清潔等が自主的に行える環境となっている。			◎	居室の入口には、利用者が分かりやすいように大きな花などの目印が表示されている。居室やユニット内のトイレには手すりを設置され、利用者自身で立ち上がりなどの動作ができるよう工夫している。ユニットのリビングから直接庭に出られ、利用者は花の水やりなどができるようになっている。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	洗剤等は、直接利用者の取れないところや、目に触れないところへ保管している。				
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。（ぼうし、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等）	○	雑誌類や歌詞本は、目に触れる所へ保管し、いつでも誰でも気楽に手に取れるようにしている。				
29	鍵をかけない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット（棟）の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。（鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等）	◎	施錠は多くの弊害をもたらすことを、身体拘束高齢者虐待防止委員会や職員研修会で繰り返し学んでおり、理解している。	◎	◎	◎	鍵をかけることの弊害について、代表者を含め職員全員が理解している。防犯のため、夜間19時から6時までの間は玄関を施錠している。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	家族にも日中ホーム内全てに錠をかけないということを理解していただいている。				
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している（外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等）。	○	玄関にのみセンサーを設置し、チャイムで出入りが分かるよう工夫をしている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	◎	入居時のフェースシートやご家族からの情報により、把握している。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	1日1回バイタルサインの測定、及び常に状態を観察することで、異常の早期発見に努めているが、職員の能力によって差がある。異常があれば時系列でケースに残している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重症化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	普段と違う症状があれば看護職員やかかりつけ医へ連絡・相談し、処置や受診ができる体制となっている。早期発見、速やかな対応により重症化防止につながっている。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	入居以前にかかっていた医療機関への通院を基本としながらも、家族の希望があれば施設嘱託医へ転医できるよう支援している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	本人や家族の希望に応じた医療機関へ通院し、適切な医療を受けられている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	職員が受診介助した場合は、家族へ診療結果の報告を行っている。ご家族が受診付添をされた場合には、診療結果を伺い、日誌やケースへ記録し職員間での情報共有もしている。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	入院の際には、概ね聴取時に情報提供もするが、後ほど詳細をサマリーへ記載し提供した。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	入院中にはお見舞いへ行き、直接状態把握をするともに、病院職員や家族に状態確認をスカンファレンスを行う等、早期施設復帰できるよう努めた。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	○	かかりつけ医や地域連携室との関係は構築できているが、かかりつけ医以外や、緊急の場合はその限りではない。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	看護職員が配置されており、状態に変化がみられた時には、報告し対応している。受診の必要があると判断された時にはかかりつけ医や救急外来へ連絡し、対応した。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	看護職員が配置されており、連絡体制はできている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	毎日バイタルサインの測定を行い、全身状態の観察も行うことで、異常の早期発見・早期対応につなげることができている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	△	医療機関から出された処方箋を各ケースへ綴じているが、職員全員が把握はできていない。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	看護職員が薬を仕分けし、介護職員が2名で確認している。服薬介助前には名前を声出し確認することで誤薬防止に努めている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	副作用も含め、日々全身状態の観察を行っている。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	眠剤服用中の入居者には、夜間睡眠状態の観察をし、経過の記録報告をし、医師と相談のもと用量の調整を行った。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	契約書に重度化した場合や終末期のあり方について記載しており説明を行っている。状態の変化に応じて家族と話し合い、意向を確認している。				事業所としては看取り支援の実績はないが、利用者が重度化した場合には家族や主治医、管理者等で話し合い、方針を決定し支援している。「事業所に迷惑をかけるのではないか」という家族の思いもあり、看護職員が配置されている敷地内の特別養護老人ホームに多くの利用者が移る状況となっている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	重度化した場合や終末期となった場合には、家族・かかりつけ医・協力医療機関等と今後の方向性について話し合いをもった。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	職員それぞれの力量は把握できており、対応できる職員と力不足を否めない職員がいる。終末期には自力で痰も上手く排出できず、喀痰吸引することでかなり状態が落ち着くことがあるが、喀痰吸引できる職員も限られている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	契約時に事業所でできることできていないことについて説明をしている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	重度化し病院で終末期を過ごされる方については、家族や担当看護師に状態を確認し、お見舞いに伺い本人や家族の心情に寄り添った終末をホームでむかえたいとの希望があれば意向に沿った支援を行いたい。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	家族の精神的・身体的な負担にならないよう話を伺い、気持ちに楽になるよう配慮している。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	特養含む職員研修会で、定期的に感染症について学んでいる。発生した場合は速やかに特養での感染症委員会が開催され指示通りの対応や予防に努めている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	安心マニュアルの中に感染症対策があり、感染経路や処理方法、消毒薬の用法、用量等記載されている。また職員研修会において嘔吐した場合の準備物や処理方法を実技を交えた訓練を行う体制が整っている。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	◎	感染症発生状況により感染対策委員会が行われ、それに基づき予防・対策を行っている。感染症発生状況についても特養事務所、感染症対策委員会より最新情報が入手できている。				
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	◎	特養事務所・感染症対策委員より情報が入るため、随時対応できている。				
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	職員は必ず出勤前に検温し、出勤時には手洗いうがいを実施している。来訪者にも検温・手洗い・手指消毒をお願いし、応じていただいた。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	面会時には、家族と本人について話をしたり思いを受け止め、良い関係を築いている。				法人全体で実施する地域交流文化祭などの行事案内を家族に送付しているが、事業所のみで行う行事の案内はしていない。今年、事業所単独の行事としてそうめん流しを企画していたが、新型コロナウイルス感染症対策のため、やむを得ず中止となった。今後、事業所の行事や活動に家族が参加できるよう検討することを望みたい。事業所独自の広報誌はないが、法人で発行する機関誌には職員が一言を添え、事業所の写真等を掲載して家族に送付している。家族の意向等は、職員が電話連絡や面会時に聞いているが、職員の異動等の情報は報告できていないこともあるため、今後は家族への伝達方法などについて工夫することを期待したい。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	◎	家族来訪時には玄関先まで出迎え、笑顔で挨拶するよう心掛けている。居室でお話される際は椅子を用意し、お茶をお出しすることでゆっくりくつろいでいただけるよう配慮している。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	△	行事等には参加していただいているが、以前の様なホーム特有の催しはなく、検討が必要と感じている。	○		△	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	面会時や通話時にはホームでの日常の様子を報告したり、毎月発行する機関誌に「みしょうの里だより」として日常の一コマを写真付きで掲載し、送付させていただいている。	◎		○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的な内容を把握して報告を行っている。	○	家族とお話する際には、入居中の情報提供とともに何か気になること等はないか確認し、その都度求められる内容について報告している。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	家族との関係性を理解しており、それぞれに見合った対応に努めている。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	面会時や大まかな行事予定は機関誌で報告を行っている。また職員の異動時にも報告をし理解を得ている。	○		○	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	△	事業所全体の盆踊りや運動会では多くの家族に参加していただき、交流を図る機会はあるが、そういった交流する場が少ないと感じている。				
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	入所時や面会時、ケアカンファレンス時に日頃の状態を説明し、転倒や誤嚥等のリスクがあり、センサーマットの使用や食事の工夫をおこなっていること等理解していただいている。				
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	◎	利用契約書に記載し、説明により納得していただいている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退居時の理由については特養の順番が来て、入る意思がある場合や入院しそのまま退院の見込みがない場合が多い。十分に利用者や家族と話し合いの上、納得のいく退居を支援している。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	利用契約書に基本料金や加算料金、加算の内訳や介護保険給付対象外サービス(家賃・食費・光熱水費・共益費等)記載し、説明により同意を得ている。また料金改定時等においても同じである。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	事業所の設立時や移転時には地域住民の方に集まっていただき、事業所の目的や役割等説明し理解を得た。		◎		事業所の敷地内には特別養護老人ホームがあり、オカリナ演奏や民謡などのボランティアが来訪したり、法人の地域交流文化祭などには多くの地域住民が参加したりするなど、地域との交流を図っている。また、地域で開催されている認知症カフェには利用者と一緒に参加している。現在、新型コロナウイルス感染症対策のため、十分な交流が行えていないが、終息後には従来からの地域交流を再開する予定としている。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。（日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等）	○	町の行事に出掛けたり、施設が主催する文化祭や運動会では多くの方の来訪があり、地方祭では神輿・櫓・ハツ鹿・獅子舞などを見学し、演者との交流も楽しんだ。		○	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	○	色々な団体のボランティアやオカリナ演奏の来訪等地域の人の支援が広がっていると感じている。				
		d	地域の人々が気軽に立ち寄ったり遊びに来たりしている。	△	山の中腹という環境であり、時々は見学に来られたり、利用者の知人が尋ねて来られる程度である。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	△	隣近所は1軒しかなく、挨拶をしたり会釈をする等のお付き合いで日常的なお付き合いには至っていない。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。（日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援）	○	ボランティアでオカリナ演奏に毎月来ていただいたり、特養からの流れにはなるが赤十字奉仕団によるお化粧やJA女性部の清掃ボランティア等来ていただいたが、新型コロナウイルス感染症予防のために現在は中止している。				
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	○	地域で開催される行事（旧保育所跡地でのバラ鑑賞・文化祭等）に参加したり、認知症カフェに出向き、楽しみのある暮らしを支援している。				
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている（公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等）。	○	近隣のスーパー等からの食材配達、美容院来訪によるカット、消防署と連携しての消火訓練や避難訓練、風水害の対応、救急救命講習、警察署より不審者対応についての講習、町内のグループホームや小規模多機能との集まり等関係を深め築ける取り組みを行っている。				
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	2ヶ月毎に開催しており、ご家族や地域の方に出席していただき声を聞いている。新規利用者の方にも参加していただいている。今年の3月よりコロナウイルス感染拡大予防のため、事務局のみで開催し、メンバーには議事録を送付している。	○		○	運営推進会議には利用者や家族の参加があり、事業所の行事やサービスの取組み状況などを報告している。会議では参加者から意見や提言が出され、サービスの反映されてた内容などは再度会議の中で報告している。新型コロナウイルス感染症対策のため、今年3月からは事業所の関係者のみでの開催となっているが、会議内容は、参加メンバーに送付している。現在のところ、全ての家族には送付できていない状況である。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告している。	○	会議内で利用者やサービスの実際・取り組み状況や内容、外部評価結果について報告している。また誰でも閲覧できるようにしている。			○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	○	介護に関する質問があり分かる範囲で返答している。また、避難訓練時に気付いたことや緊急時の対応等アドバイスをいただくこともあった。		◎	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	テーマに合わせて参加メンバーを増やすことはなかったが、出席される方には事前に連絡を取り、都合の良い日程や時間帯に合わせて行えるよう配慮している。		◎		
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	◎	いつでも誰でも閲覧していただけるよう、会議録は玄関に設置している。参加メンバーの方には、前回の議事録をお渡ししている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	「日々の暮らしの中で語り合い、その人らしい生活の支援」を理念として掲げ、目につきやすい位置に掲示し、意識を高めている。また、理念に基づいて業務に取り組めているか振り返っている。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	利用者の方、ご家族、地域の方にも理念を知っていただけるよう目につきやすいリビングに掲示している。	○	◎		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	人事考課を行いケアの実際や力量についてはある程度把握していると思う。法人内の研修については、職員全員が参加しているが外部研修については正規職員のみが参加している。今年に入り新型コロナウイルス感染症の影響により研修には参加できていない状態である。				週2回、法人代表者の来所があり、職員と相談できる機会がある。何か相談ことがあれば電話で報告するほか、代表者に来所してもらうこともある。また、事業所では勤務歴によってリフレッシュ休暇を取得できるほか、金一封が付与されるなど、働きやすさにつながる職場環境づくりがされている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	法人内の職員研修会や喀痰吸引研修に参加しスキルアップ向上に取り組んでいる。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	人事考課制度を取り入れ、本人の目標や要望・意見等、また面接において意見を聞き、職場環境や条件の整備に努めている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	町内のグループホームや小規模多機能施設の代表者が集まり3ヶ月毎に会合を開催し、意見交換しながら情報を収集し、職員の意識向上に取り組んでいる。また行政や医療関係者との研修会にも参加している。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	親睦会の役員を中心に夕涼み会・スボレク・忘年会等を実施し職員間の交流を深めたり日頃の疲れやストレスの軽減する環境づくりに努めている。	○	◎	◎	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	身体拘束高齢者虐待防止委員会を開催し、話し合っている。職員研修会でも外部講師を招き、学んでいる。				法人全体で勉強会を実施し、職員は虐待や不適切なケアについて理解している。特にスピーチロックや言葉の暴力については、管理者と職員は利用者に配慮し意識した支援に努めている。冷たく感じる言葉や上から目線の言葉かけなど、職員同士で注意し合えることもあるが、難しい場合には管理者に報告し、月1回のミーティング等で話し合うようにしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	職員会議やミーティング、会話の中で日々のケアについて振り返り、話し合い反省すること多い。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見過ごされることがないように注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	虐待や不適切ケアを発見した場合の対応方法や手順についてマニュアルにも記載されており、とりあえず報告の義務があることについては理解できているが全職員についていえば細かいことまでは周知できていない。			○	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	顔色や表情、声のトーン、入居者の方への接し方等を確認しながら日頃と違う変化に気をつけてはいるが、見逃している時もあると思う。				
44	身体拘束をしない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	行動を制限するため紐でしばったり、ベッドを柵で囲ったり、ミトン手袋やつなぎ服の着用等の禁止、緊急やむを得ない場合とは、「切迫性・非代替性・一時性」の3つの要件をすべて満たしていること等大まかなことは理解している。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	定期的に身体拘束高齢者虐待防止委員会の中で拘束や虐待にあたるケースはないか話し合う場を設けている。				
		c	家族等から拘束や施設への要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	病院へ入院していた時に弄便行為が頻繁にあり、つなぎ服を着せられていたため、退院してからも着せて欲しいとの要望があったが、拘束にあたることや本人への精神的苦痛を考えてトイレで気持ち良く排泄することで弄便行為はなくなるとを説明し理解を得た。				

愛媛県グループホームみしょうの里

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する 制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	△	日常生活自立支援事業と成年後見制度の違いや利点について学ぶ機会は少なく全職員は理解できていない。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	×	成年後見人制度を利用される対象者はおらず、情報提供や相談等の支援は行っていない。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	×	制度を利用される対象者がいない。				
46	急変や事故発生時の 備え・事故防止の 取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	安心マニュアルを各職員が所持している。各症状別対処法も掲載しており、確認している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	急変時(喀痰吸引等)に対応できる職員は限られており、異変があればすぐに看護職員(不在時には特養の看護職員)へ知らせバイタル測定を行い指示に従っている。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	些細なことでもひやり報告書に記載し、受診した場合はインシデントや事故報告書に記載し、必要に応じて町への報告を行い、会議等で再発防止に向けて検討している。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	利用者の方、一人ひとりの状態から転倒や誤嚥等のリスクがあることを検討し、職員は理解して事故防止に取り組んでいるが、キャリアやレベルにより個人差がある。				
47	苦情への迅速な対応と 改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	安心マニュアルの項目の中に「相談・苦情処理体制」を作成し、相談や苦情があった場合については検討を行っている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	苦情が寄せられた場合には苦情受付書を作成し、速やかに手順に沿って対応している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	苦情は1件のみであったが、職員による利用者の方への被害・損害であり、上司を交えての話し合いを行った。また本人や家族へも早急に詫言する等速やかに対応した。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	介護相談員2名が7月に来所し、利用者との話し合いの場を設けている。また、運営推進会議に出席し意見や思いを言っていたりすることも。職員も話しやすいような雰囲気づくりや声かけを行っている。			○	月1回、管理者は各担当職員から話を聞く機会を持っている。利用者は話しやすい職員に、夜勤時など会話で意見や要望を伝えている。また、定期的な介護相談員の訪問の機会もあるが、新型コロナウイルス感染症対策のため今年度の受入れは行っていない。家族から直接意見などは出されることがないため、面会や受診時、計画更新時などに職員から積極的に話しかけ、意見を聞くようにしている。日頃から職員は利用者に声をかけ、利用者へのより良いサービス提供ができるよう、気づきのあった場合には管理者に伝えている。職員から出された意見は法人の管理者会議で報告することもある。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	相談窓口や意見箱を設置したり、面会時等には意見や要望等を伺っている。	◎		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	△	相談窓口の掲示や意見箱を設置しているが、適宜、情報提供は行っていない。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	職員会議に出席したり、年1回は職員全員と面接を実施し直接話を聞く機会を設けている。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	関係性は築けており、日頃からの会話の中や会議等で意見や提案を聴く機会を持ち、利用者一人ひとりがその人らしく生活できるよう検討を重ねている。			○	

愛媛県グループホームみしょうの里

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	提供している支援が適切であるか振り返り、第三者の客観的立場からの評価により、利用者本位のための支援になっているか等、サービスの質の向上に努めている。				外部評価によるサービス評価の結果等の報告は、運営推進会議の中で行っているが、事業所の取り組みのモニターまでは行われていない。今後は、目標達成計画の内容や実施状況について、運営推進会議等で報告し、参加者から意見や評価がもらえるよう、検討することを望みたい。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	○	外部評価後には、それぞれの項目を振り返り、特にできていないことや見過ごしていること、家族や地域の方のアンケート結果、調査員の方の意見を参考に、達成に向けて取り組んでいる。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	評価結果を踏まえて達成計画を作成し、家族や地域の方のアンケート結果や調査員の方の意見を参考に、達成に向けて取り組んでいる。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	△	評価結果を運営推進会議参加メンバーの方へ詳しく報告は行っているが、取り組み状況の報告や定期的なモニターは行っていない。	○	○	△	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	事業所内や運営推進会議等で目標達成計画の取り組みについて話し合うことは少ないが口腔指導においては個別に観察したり、指導できている。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	○	火災・地震・風水害等の災害発生時の対応についてマニュアルを作成し、各職員が所持し周知している。				消防署の協力を得て敷地内の特別養護老人ホームと合同で、日中と夜間を想定した避難訓練を実施している。今年度の実施も予定しているが、新型コロナウイルス感染症対策のため、日程は決まっていない。今年、町内に出された土砂災害避難勧告時には、特別養護老人ホームに全ての利用者が実際に一時避難した経験をしている。事業所の近隣住民が少なく協力を得にくい状況にあるため、今後は家族へ合同訓練の参加を呼びかけ、防災対策に関する話し合いの機会を作るなど、検討することを望みたい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	◎	消防署に協力依頼し、消火訓練や、日中・夜間を想定した火災訓練、土砂災害の避難訓練、救急救命講習を実施している。また、警察署からは不審者対応についての講習があり、職員全員が学んでいる。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	定期的に消火設備点検や避難経路の確認を行っている。非常食や備品については特養に備蓄しており、使用期限等を確認し新しい物と入れ替えている。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	地域住民の方とは法人で行う行事や運営推進会議での連携が取れている。また、消防署・医療機関・他事業所の協力・支援体制が確保できている。	△	◎	△	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	○	グループホーム独自では取り組んでいないが、法人全体として災害時の責任者や法人の代表者が講習会の参加し、地域の災害対策に取り組んでいる。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	○	認知症サポーターとして中学生を中心に養成講座を行い認知症ケアの理解や対応方法等の啓発活動に取り組んでいる。				事業所では、町内のグループホームや地域包括支援センター等で開催する「あいなん活き活き推進会議」へ参加、協力するほか、中学生への認知症学習など、地域活動も協力しながら実施している。地域住民からの事業所の空き情報などの電話問い合わせには対応しているが、地域の認知症の人やその家族から相談に応じるまでには至っていない。今後は事業所として、地域住民への認知症ケアに関する支援などについても検討することを望みたい。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	△	相談は少ないが、本人や家族から「グループホームにはどうしたら入れるのか。」といった相談を電話で受けることがある。		○	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	×	グループホームでは行っていないが、特養では夏祭りや文化祭等地域交流の場として活用しているため参加はしている。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	希望者があれば実習の受け入れも可能であり、地域の清掃ボランティアの方が来ていただいた。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	○	愛南町内のグループホーム、小規模多機能、地域包括の集まり、年4回スマプロ会を開催しており、参加している。昨年、地域イベントである「あいなん活き生き推進大会」に参加することで協力し合い連携が図れた。			○	